

221
乙
426

靈驗集

第二編

特 8
718

權大教正河上 市藏先生 序文
權大教正山本貞治郎先生 校閱
少教正三木 惟一先生 校閱
國の教編輯員守坂竹次郎 編纂



空 驗 集

第 二 編



岡山 大久保翠琴堂藏版

靈驗集第二編序

教祖曰夫去疾病道之緒餘猶
書之有伊呂波不足為重也抑
自道而論去疾病則其為緒餘
為伊呂波固無論焉已然自人
之體軀論之則疾病也者亦人

身之一勁敵矣人身而或罹疾
病乎天賦之職不能勤而志業
亦隨而荒廢矣欲忠而不能忠
欲孝而不能孝呻吟於床蓐之
上消居諸於藥鎗之間者豈非
人世之一大不幸乎哉天運爰

循還

圓靈洩秘於我教祖以授造化
之柄爾來人身體軀之勁敵也
者治癒回復其易々也恰如伊
呂波之點一畫人世之一大不
幸也者化為至幸多福之人其

心之樂也熙々如享太牢如春
登臺於是乎身體強健而忠與
孝各得全矣天職可得盡而志
業可得達也神恩廣大其澤無
極矣夫學書法者自伊呂波入
而進至變化風雲泣鬼神歸于
本教者受用此集而深感得神
德靈應之妙機益發輝分心之
靈明克履行人道以昇教旨之
堂奧則其心之快樂而熙々者
豈啻如享太牢與春登臺而已
乎又靈驗集第二編成快讀玩

味熙々而題之

明治三十五年七月上澣

權大教正河上市藏識

少教正三木惟一書

緒言

嗚昔靈驗集第一編の發刊せらるゝや四方の諸君續々として講讀の榮を辱ふし尙又第二編の發刊を求めらるゝもの切なり抑本集の斯く需用せらるゝは何の故そや道の行るゝもの廣く信徒諸君の本教に熱心にして道を求めらるゝの心深實篤至なるの致す處たるを信するに足るなり余は久しく國の教雜誌社員の末列に廁ると雖も本教に於ては從

味熙々而題之

明治三十五年七月上澣

權大教正河上市藏識

少教正三木惟一書

緒言

嗚昔靈驗集第一編の發刊せらるゝや四方の諸君續々として講讀の榮を辱ふし尙又第二編の發刊を需めらるゝもの切なり抑本集の斯く需用せらるゝは何の故そや道の行るゝもの廣く信徒諸君の本教に熱心にして道を求めらるゝの心深實篤至なるの致す處たるを信するに足るなり余は久しく國の教雜誌社員の末列に廁ると雖とも本教に於ては從

事すること未だ日淺く況して編集の事の如きに至つては敢て其如何を辨ること能はず唯々其勞を辞せずして四方諸君の切なる需用に對へんこの赤志を以て茲に山本三木の兩先生に請ひ奉り前編に續きて此編を發兌するの運ひに至れり編中の事實の如きは兩先生が撰輯採擇せらるゝ處にして殊に其正確なるものを纂められ尙又親しく見聞せられしものをさへに載録せられたれば前編に

繼きて神徳の萬か一をも顯彰し奉るの一端ともなるに庶幾からん歎唯恐るゝ處は余の不肖にして校訂の間或ひは文字の誤り或ひは誤植のヶ所等なき能はさることを讀者諸君其至らざるを示教して余か發刊の舉ある所以の微意を諒し玉はゞ幸甚

編者識

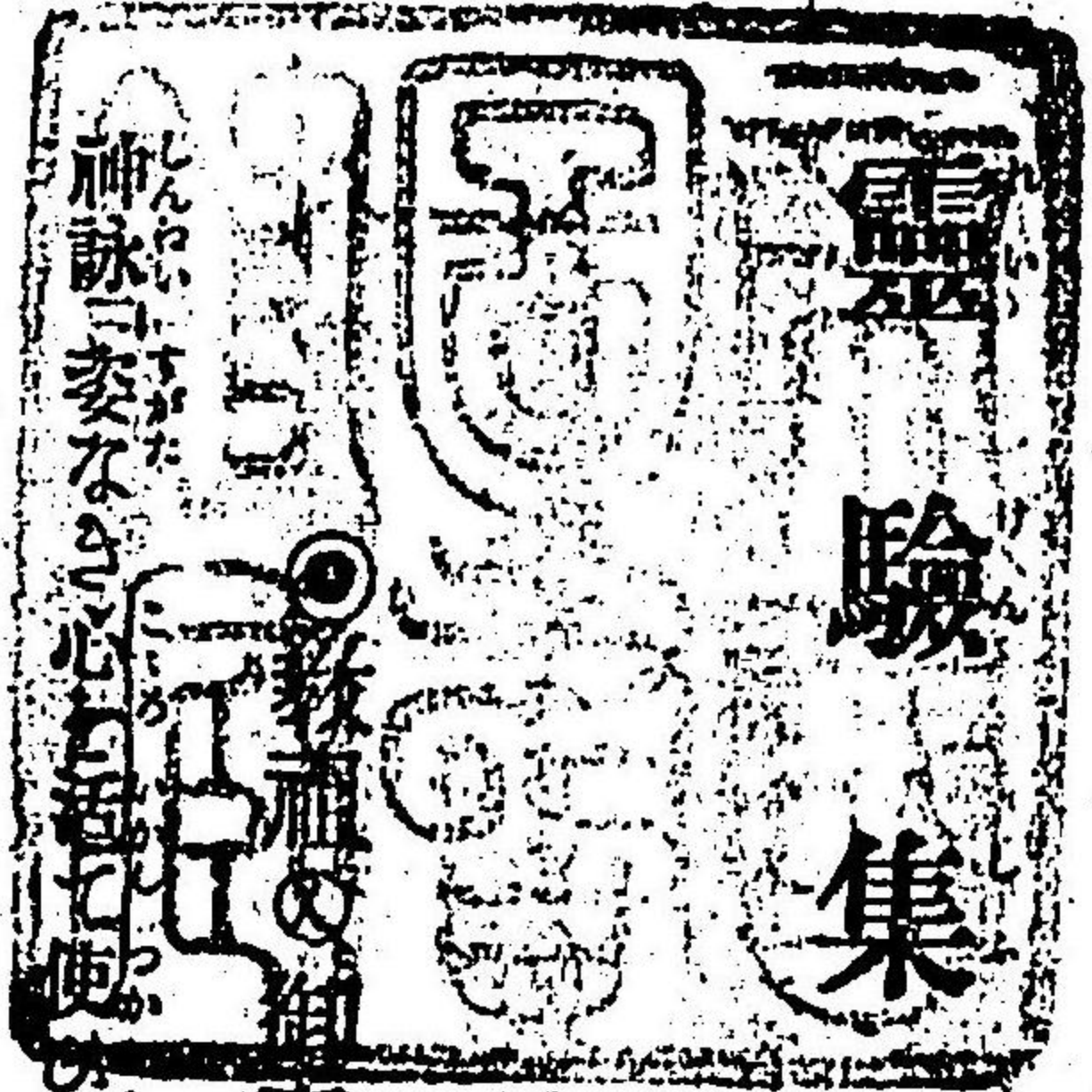
靈驗集 第二編 目次

- ◎ 教祖の御高德を慕ひ難病平癒す 一
- ◎ 教祖の御諭に感して危篤の病人全癒す 八
- ◎ 靈夢を蒙りて開眼す 十二
- ◎ 御教諭に依りて癩病癒ゆ 十五
- ◎ 信心と孝心の徳に由りて神助受く 十九
- ◎ 陽氣に化せられて疾病全癒す 二十四
- ◎ 至誠悪人を感動せしむ 二十六
- ◎ 御蔭を蒙り病母全癒し不孝者孝子となる 三十
- ◎ 教諭に感して靈妙る神庇を蒙る 三十三
- ◎ 孝心と貞節との効驗 四十二
- ◎ 形を忘れて肺疾全癒の神庇を蒙る 五十二

- ◎少教正大西定一氏靈驗口話の筆記 五十八
- ◎神歌に依り御蔭を受く 六十一
- ◎孝子賞を受く 六十三
- ◎一心決定の効廣大の御蔭顯はる 六十九
- ◎起死回生の神庇を被る 七十四
- ◎一心決定肺病忽ち平癒す 八十一
- ◎神徳に依りて蝗除去す 八十四
- ◎神庇を蒙りて數回の病氣災難を免かる 八十六
- ◎遠征の人黒死病を免る 九十八
- ◎數度の難病平治す 百三
- ◎無邪氣の小兒土匪の難を免かる 百十一
- ◎譬諭の一言忽ち活氣を與ふ 百十九

- ◎權中教正渡邊博氏の靈驗 百廿六
- ◎道味を悟りて大患全癒す 百卅二
- ◎刀瘡全癒の神庇を受く 百四十七
- ◎不治の眼病即座に治す 百五十
- ◎教祖の御講辭を拜聽して眼疾平癒す 百五十三
- ◎教祖神直授の禁厭を戴きて難病癒ゆ 百五十七
- ◎不信者改心して御蔭を受く 百五十九
- ◎癩病全癒す 百六十四
- ◎説教に感して癩僻全癒す 百七十一
- ◎精神の強き靈驗 百七十四
- ◎神庇に依り眼疾癒ゆ 百七十九
- ◎教祖神の御講辭を蒙りて癆瘵全癒す 百八十六

集 驗 靈



第二編

守坂竹次郎編

神詠ニ委なき心と誓ひて使ひなば天がしたにぞ満ち渡るらむ

教祖神は

御神の御心と御一体にして萬事誠の一に止り玉ひみちは満るなり一心満る時は邪の入る事なしされは天照大神の御分心御安泰なりと説き玉ひ

又神人不二神代今日今日神代とも説き玉ひ生々の妙理をさとり玉ひし事は今更茲に喋々する迄もなく教徒たる人々は御承知の事なり併し口や筆

- ◎三年の躰神徳により平復す 百九十二
- ◎蔭の禁厭にて蘇生の神庇を蒙る 百九十四
- ◎迷夢覺めて長病一時に全癒す 百九十九
- ◎産婦御陽氣の御蔭を受く 二百二
- ◎難を得て幸福の神庇を蒙る 二百七

目次終

にて立派に述べ立てども其實行正しく御足跡をふむにあらざれば浪なき
 立て花にひとしからん歟教祖神御在世中岡山藩士にて同城下細堀町に住
 める石田鶴右衛門(祿三百石)なる人江戸詰中病にかかりされば藩主御歸
 國の際石田氏は江戸詰年限中なれども病氣のため出格の恵みを以て御供
 にて歸國を申付られたるに道中より益々病氣さし重り(瘰癧なりしと云
 ふ)播磨國大藏谷迄歸られし時はに極めて重症となりしかは御供を免せ
 られ保養致すべしと命せられ旅館にて醫師を迎へ診察を受くるに最早治
 療の道なしと云へり(首一面にかたまり出来漸く咽の中央指一本程柔さ
 所あり)本人も覺悟し進も本復はいたしまじく(菜汁も通りずツク息は

かり肩にてする一ツ息と云ふ如し)併し侍たる者が途中病のため死す
 るは如何にも残念の至なり若し國元に居りなば兼て信仰の黒住先生の御
 禁厭を戴き助るかも知れざるにかく旅の空にて病に命を取らるゝは異々
 も無念至極の事なりと心中に思ひなから同氏は平素本教の篤志信者なり
 さればさすがに斯る場合にも下腹に息を入る心持にて心を鎮め 天照
 大神を黙禱し只管教祖の御事を慕ひて常に承りし御講話を思ひ出し死に
 臨みて不乱不礙とは今此の時なりと即て我は 大御神の御分心なる事を
 思ひ諸の雑念と去り我を離れ神に任せ奉る氣になりて肉体の事を忘れ心
 勞苦痛に心を乱さず只難有ひくと思ひ入りければ眼るか如く静まりし

を家來の者共は道中より心配し御供落ち申付けられしより一層心配致し
何卒して御助け申上度と晝夜の別なく忠かに看護に心を盡せしに今しも
臨終と見て涙ながら介抱致し居る内ふと病者立ちあがり玄關に出で頻に
挨拶し頭をたれ又元の坐に付きアヲ難有や尊やと音聲も平日の如くなれ
ば付き添ふ家來どもは臨終に至り苦し紛れに發狂いたされしにはあらざ
るかど疑ひなから其故を尋ねければ先刻黒住先生御出で下されて貴所
御難義なさるとうな御まじなひをして活して上げますと口中に指を入れ
玉ひ瘰癧の根とてほうづきの中の實の如き物を片手に一杯とり玉ひ一度
御捨てなされて又片手に一杯とり玉ひしと思ふ内アヲ不思議や安く出來

身体自由に氣分も爽になりたれば先生の御歸りを御見送り申はたるなり
と涙を流して喜び語られたりしが夫限りに至快いたし平日の如く更に病
なく身体も大丈夫になりたり此上は早く歸國致し御主人様に御目見へ致
したくどて只一日の休息にて直に發足と申され同氏の家來どもは夢の如
く何とも合点參らされども何分九死と見へし大病も朝日に霜の消へたる
如く治りたるを見て唯難有ひやら嬉しいやらにて一同は手の舞ひ足の踏
み所も知らずと申す次第にて主従共に悦び其翌朝發足し（以前高祿の土
の道中は籠なり）岡山へ着自宅には歸りすして直に大元へ參り教祖へ御
目に憑り右の次第を申述べ厚く御禮申上られければ教祖宣はく私は參り

は致しませぬがお留守より御病氣のよじにて御祈禱御頼みにより厚く御
 祈念申上げし故幸魂が往て働く事があるものであるから私の幸魂が参り
 しならん鬼も角も御病氣の平癒ありしは何より目出度きことであると御
 悦び成されしとかや 姿なき心を活て使ひなは天かしたにぞ満ち渡るら
 ん因曰神代には大日貴命の幸魂が外つ國々を経営して歸り玉ひしと云ふ
 こと古典にあり其他の書物にも幸魂の御活動の事見へたれども人智の狡
 慮を以て皆太古の事とし今末の世となりてはかゝる奇き事はなしと推し
 極め甚しきは古典のことさへも疑ひ色々の説共をなす族多ければ皇國の
 御徳をも失ひ神の御稜威をも辨へざる世の中となりゆくを 大御神の御

神慮によりて教祖の神を生出させ玉ひ世人を呼び覺し 皇國威を輝せ玉
 はんどの神はかりにや教祖は神人不二生々の大道を禀受し玉ひ誠の道を
 開き玉ひ論より証據にて御在世中より奇しき御事多く従て高弟方及び今
 日に至る幸魂の御働さにて難治と申す病も治まり天變地妖の災難も免れ
 或は陰の禁厭にて種々靈驗あり又は蝗の災ひ草木の實に虫つきたる如き
 種々の禍事は神の靈徳によりて消滅し眞に動天驚地の神業は一々枚擧に
 暇なき様なるは全く 天照大神御開運の御時節到來せしによると教祖の
 御孝心正直の誠が天へ通し玉ふ所より神徳の尊き前古未曾有の神驗顯は
 る事なるべきかと畏くも思ひ奉ることになむされば神の御國に生れた

る人々は小狭かしき狹隘なる小理屈を止めて神理をさとり斯道の妙味を
咀嚼して眞の敬神愛國の念を振起し神皇親の三ツの恵を報ひ富國の基を
立つるの雄々しき日本魂を築き堅め玉はん事を希望す

◎教祖の御諭に感じて危篤の病人全癒す

教祖神御在世中備中國窪屋郡岡谷村に大庄屋役を勤めて居りし友野鐵五
郎なる人あり此人年過て子無く何卒一子を擧げたきものと日夜望み居た
りしが適王の如き男子出生せり夫婦の喜悅譬ふるに物なし蝶よ花よと寵
愛しけるか寸善尺魔の譬への如く勤かの煩にて藥石効を奏せず遂に黄泉
の客となりたり父母悲歎に不堪妻女は産後常に多病にして爽快なる日少

なかりしが愛兒を失ひてより悲歎のため他病加わり日々衰弱せり百
方醫療に手を盡すと雖も病勢日々に加わり既に危篤の場合となれり他に
詮すべなければ此上は神明に頼るの外はあらじと思ひ教祖神を御招待申
上しが教祖は患者に向はせられ貴女は愛子を失ひたるを最く歎き居らる
と由しなるが其可愛く思はるる一子は不孝ものにして大罪人なり今を限
り颯ぱり見かぎりたもふべしと諭し玉ひしかは患者は重き枕をのけ大に
立腹の体にて彼れは愛らしき子にして未だ不孝を爲すほどの能力もなき
ものなり無情なる事を仰せらるるものかな何を以て不孝者と仰せらるる
やと伺ひければ教祖宣文に親を敬ひ親の心を悦ばしむるこそ子たるも

の道なるに親を見捨て先たちて死し苦勞して養育せられし恩に報ひ
 す剩へ両親に悲しみを掛け是れが誘引に依り遂に三津の川を共に渡らん
 とする大罪人なり故に彌以斷念せらるべし今下男下婢共の内御小兒の
 生前の事ども語り合ひ共に歎き悲しみ或は涙ながらに香花等を靈前へ供
 へなどするものあらば表向は親切らしく見ゆれども是は陰氣を増し病氣
 を増長ならしむ媒となるなり又強てお世辭をいわず鉢巻等して小歌でも
 うたい勇ましく業務のみ働くものは表面は不深切のよふなれども陽氣を
 引き起し不知不識の内一家内の心を活し自然に病氣を輕からしむるもの
 なれば是等者のは愛して御使被成と宣ひければ其御諭じに感し入り心を

取直しければ何時の間にか心勇ましくなりて斯かる大病快くなり日な
 らずして全快したり依て手厚き信者となり今數代の子孫に於ても御道を
 慕ひ益々信仰深かりしとぞ
 編者曰人の親たるもの我子を失ひたる程悲しきはありし是れは親子の
 情にて左も有べる事なれども梅雨の霽れやらざるがごとく何時まで
 も心舞れずして可愛く思ふとも過ぎしものは歸らぬものなり歸へらぬ
 ことを繰返しし思ひ出しては大御神より受けて備へたる大切なる御
 分心を傷むるのみならず我身も死に至るは天に對して是程の罪はあ
 るまじ教祖神の御諭に感し悲歎の積鬱一時に消散し心氣快活して危篤の

患者遠に全癒せしとは實に尊き事ならずや教祖神心は主人なり形は家
來なり悟れは心が身を使ひ迷へは身が心を使ふ云々を論し給ひし御詞
を熟讀玩味すれば自ら覺悟する所ありん乎

◎靈夢を蒙りて開眼す

備後國翁佐一之介(後翁陸奥守と改名)の室櫻井かね子の方は櫻井喜間太
氏の女にして教祖神の御孫女に宛らせらる翁氏京都神樂岡へ勤務中隨行
せられけがる折節眼病に罹られ外かゝの信徒等の疾病は立處に御蔭の
りしに如何なる故にや櫻井氏のみは兎角快方に到らす久しく病癒に叫吟
せられけるか熟らく心に思はれける斯く祈りても自分の誠だらぬゆへ

に御神慮に叶わぬ處ありて平愈せざるならんと自から戒め形の事を離れ
只誠一ツになりて厚く信仰ありしに神樂岡冬至祭の夜同氏の恍らくと
眼られしと思ふ時に教祖神枕邊に立たせ玉ひ爨に授けおさし歌を畑佐七
(佐七は京都商人にて神樂岡創立の時)に譲り與ふべしと宣ふかね子氏は
夢心に此仰せを謹んで考へ玉ふに未だ嘗て教祖より御歌を戴きし事なく
只岡山西田町萩田氏の老母より『身も我も心も捨てて天地のたつた一ツ
の誠計りに』との教祖の御眞筆の御扇子を貰ひ受し事あるのみ其他に心
に覺へなければ教祖に向ひ御歌と宣まるは右の事にてはべらすや其御歌
なれば妾の身にも替難き程に秘藏致居候故是計りは人に譲り候事は御免

し玉はれたしと御断り申上けるに教祖はかね子氏の脊を撫て玉ひつゝ左
 な云ひぞ是非に譲り遣せよ其代りには別に扇子の歌を授くべしと宣ひ
 末廣の限り知られぬ道の徳受け得て開け人の要めに』との御歌を詠し玉
 ひつゝ歸り玉ひしかは其難有さ心根に徹し直くさ立起さあかり禮拜せん
 とし玉ひしに教祖の御姿は見へ玉はす爰に初ては這夢の御告なりしかと
 心付かれしに折節良人翁氏は冬至の御祭典に出られ不在にて傍に伏し居
 たる翁氏の姉(京都見物旁)なる人と呼ひ起し忘れぬ爲にや右御神詠を書
 留貫ひ兎角する間に早や東雲の頃となりければ椽側に出てゝ手水を使ひ
 清水にて目を洗われける時今まで見へざりし眼の圖らすも少しく明りの

見へ初めければ此上なく嬉しき事に思ひ神樂岡へ參詣せんとて湯を浴み
 身支度などし玉ふ間に次第々々に視力加はり物の色目の薄々と認め得り
 るゝに至り神樂岡へ參詣の頃は常の如くに汗へ渡りたる難有さに其喜ひ
 何に譬へん物なく只伏し拜みく厚く御禮拜をなし歸り教祖夢中の御告
 に従ひ彼の御扇子をは畑佐七へ譲り與へられさしもの眼病は跡なく治し
 て已來身体も益健康となられ信心愈益して手厚く道を務められしと
 云ふ

◎御教諭に依りて癩病癒ゆ

岡山の藩にて或る高祿の世臣に(姓名は指支ありて之れを略す)代々血

統正しき家ありしか如何なる元因なるか其主人は不圖癩病にかゝりしか
 は金力に飽かして百方手を盡して療養しけれども其頃は此病氣は天刑病
 とさへ唱へたる不治の症なれば尠しも其効なく家族は勿論親族一同も主
 人が斯かる羞かしき病氣に罹りしは家の瓊瑤となり子々孫々に至るまで
 其患を遺傳する事なればとて大に痛心せしか當時黒住先生へ參れば難病
 強病も立處に全治せざるものなしとの噂を聞傳へ早速參詣し教祖神へ拜
 謁して病跡を申上如何様に致したなれば御蔭を蒙り得られ候にやと伺ひ
 ければ教祖の御答には唯一心に難有といふ事を幾遍となく澤山に御唱へ
 成さるれば御蔭ありと宣ひければ這は易き事なり其難有さと申す事は凡

と幾遍位唱へて然るべきやと推し返へして御尋申上ければ然ればにて候
 先づ百遍位御唱へなされよと御示になりけり彼の士は夫より大に悦ひ自
 宅の御神前に於ひて毎日々々難有々々と唱へて一心信仰せしか遂に一週
 間斯く勤めたるに何の功驗もなし依て又々黒住の御館へ參り再び教祖に
 謁して仰の通り難有といふ事を一日に百遍つゝ七日間一心に唱へしかと
 も少しも其効が見へませぬ此上は如何致して宜じきやと伺ひければ左様
 なれば今千遍つゝ御唱へ成さるべし御蔭顯るべし但し一心不亂でなくて
 は御蔭なしと宣ひければ難有と拜謝して又々千遍つゝ一週間勤めたりさ
 れども初の如く何の驗もなく依て前の如く黒住家へ參詣して教祖神へ此

の上は如何致したる宜しかるへきと申上たるに左すれば此回は一萬遍前
 の如く御唱へ被成よ必らず御蔭あるべしと宣ひけるゆへ素より正直なる
 人の事なれば其御教を一心に難有く思ひ込み毫も疑ふ心なく御諭の通り
 此回は一萬遍の毎日々々無念無想になり唱へ居りたるに其七日目と云
 ふに當りて俄に發熱し吐血甚しく遂に疲勞して打ち臥したりけるが快よ
 く熟睡したりしに奇なるかな貴さかな翌朝は顔面を始め手足に至るまで
 さしも癩病の萌じおきて人の見る目も汚けなりし難病は残りなく變じて
 無病の身体に復し拾數年の病氣は一時に全癒しければ這は如何にと著る
 しと神徳に驚歎せしと以來益厚く教旨を信仰し自身に蒙りし御蔭を本

として世人に多く御蔭を取次がれたりとぞ其士人は爾來二七御會日毎の
 に生涯一回も不參せし事なかりしと云ふ是は難有といふ事を唱へたるが
 自然に精心に貫徹し毎々唱ふる中に知らずと信心の妙處に達せしめ玉
 びし教祖が臨機の神智力に坐しけるなるべし

◎信心と孝心の徳に由りて神助を受く

教祖御在世中岡山藩士(番町)草野某氏は本教を尊信し他念なき熱心家に
 して教祖も毎度同家に御出に成りしか或時同家の娘に御詠を賜はりしは
 『一筆に示し参らす親に孝たつた一つて目出度かしく』と此御歌によりて
 道は忠孝か基なり忠孝か立ねは信心とは申し難しと教へ給ひしより彼の

娘は一層手厚く父母に孝養を盡し敬神の念益々熾みなりしかは同藩中
にても此の娘の孝名は隠れなく其聞へ高かりしか或年父なる某氏は江戸
の舊邸に行役せられ其留守中の事なりしとか一日娘は家内の隈々といつ
もの如く掃除をなしけるか兼て床上に飾りありし銅の馬の塵と拂ふに當
り如何にかしけん誤つて其馬の耳を落しけるか娘は打驚き心に思ひけら
く這は父上様の御好みになりて最も大切に玉ふ品なるにお留守中に斯
く耳を落したり父上御歸國の上何にとも御詫の致し様もなき次第なりと
甚たく心を痛めかなしみけるか折柄ふと心に思ひ定むる處ありて御神前
に至り一心に神助を祈り御神水を戴き來つて彼の落ちたる馬の耳を御神

水に侵し彼の缺けたる處へ付けて手を以て蔽ひながら心を込めてまじな
ひを施したる後手を放ち見るに耳は元の如く附きたれば是れは全く御神
徳に由て然る處と大に喜ひながら是を揺り動かし試むるも更に別状なけ
れは娘は甚たく神徳の難有きを感じ始めて安心なし且つ家内中へも右の
有様を咄したる處何れも驚きながら行き去りて其の耳を視るに更に疵もなく
能く元の通りにてありければ一同も大に神徳の奇すしく難有に感し入り
けるが其事誰れ言ふともなく人々の知る處となり遂に黒住は焼繼師なり
と云ふて是を笑ふもあり或は邪法なりと難する者もあるに至り就ては信
者中の者と雖ども未だ道の奥妙を知らぬ徒輩は世の譏りを耳にして心を

動かし信心を失ひ爲めに町内のお席にも参拜する人減したるの折柄高弟
池田千代造氏は或時町内のお席へ出て講話せられけるは皆様近來草野
氏の内に銅製の馬の耳か御神水にて付きましてより黒住は焼繼師た
などと云ひ觸らしめますか全く其通りて黒住は焼繼師て御座る但し陶器物
の壊れたるは誰れにても焼繼を致しますかならば上手な焼繼屋ても繼目
か知れぬ様に繼ぐ事はチヨツト出来ませぬ又出来た處が只ゞ陶器物位な
事てあります然るに我黒住の焼繼はナツト上手て只た陶器物の焼繼のみ
てはなく第一家内の割れて碎けたるなどは最も能くつき合せますと
れは一家内は前々にうつて變り親子も夫婦も兄弟も姑も嫁もまるて親

しく和合しますそれ等はまた朝飯前な仕事で追々進んでは天下國家をも
丸く繼ぎ合せられます忠孝や貞操は素より黒住の藥籠の中に在るて存
してある事は本教か萬道の源たる。日の御神の大道たる事て知る者は一
点の疑も起らざる筈でありますと大音聲にて説きたりしかは此席に居
合したる人々は殘らず低頭して謹聴なしたるか是れより市中のお席も舊
に復して盛に成り來り彼れ是れ誹謗せし人もなくなりたりとなり抑々
銅製の馬の耳か御神水にて付きしとは最も奇談の様なれども是れを眞に
草野氏の娘か常々孝心厚き至誠の徳か御神慮に合ひて此の如き高大至妙
なる靈驗の顯れしものにもあるべく孝行の徳によりては古來最も奇すし

靈 驗 集

く靈妙なる天徳を蒙りしものに數ある事は喋々を待たず例へば養老の孝子の瀧に甘露を得たるか如き又は雪中に筈を得たるか如き人智を以て計るへからざる靈妙なる事共は和漢に其例尠なからず況してや孝心に加ふるに神明を篤く信するの誠を以てするに於ては願ひとして何事か叶はざらん草野氏の娘か斯かる神徳を蒙りしも亦宜なりと云ふ可きかそれにつけてお互のお道人は如何にも一心の亂れぬ様忠孝と信心を專一に勤め度きものにそめる

◎陽氣に化せられて疾病全癒す

此は數十年前教祖御時代の事實なり處は岡山市番町字飛脚屋敷則武源吉

靈 驗 集

氏幼少の頃疱瘡に罹りたるか極めて難症にして數名の施治醫悉く診絶したるより其の頃全市古京町字荒手屋敷なる久保津某か黒住教に信仰し居たりしに依り全氏に禁厭を請ひたるか全氏は下野平松の岡氏と三人連いて右源吉の宅に至り御祓を執行し禁厭を施し終つて家内の者を其席に呼び集め色々御道の話しをなしたりしに家内の者等も大に安心せしに是此時久保津氏は源吉の枕元にありあわせし手遊びの獅子頭を被り同じ手遊びの大鼓を打ちならし果ては三人共踊を始めたるか其面白さに家内親族集ひし者共は一時の心痛を打忘れ覺へすどつと一同大笑ひしける斯くて自然に家内陽氣自然に滿ちけるか斯程難症なりし疱瘡も其儘に肥立好く

遂治にしたるに源吉は素より家内親族の喜ひ云はん方なく又逆も望み
なしと診断せし多くの醫師も大に感せしと云ふ

編者曰教祖神の御詞に陽氣に成れどあり陽氣とは勇ましく強く太く満
々たる心を云ふ俗に踊りたり謠ふたり舞たりするを陽氣といへども是
れ等は邪陽の類にて眞の陽氣にはあられども人の氣分を引き起し心
を慰め自然と家内中面白くなりて笑ふよふになれば其中に陽氣を萌し
不治の難症と定めし者も全快して壯健の身となりし其例少からず實に
陽氣程尊きものはあらず

◎至誠惡人を感動せしむ

少教正三木惟一氏の講話に予若年の時高弟より聞しに昔因幡國なる斯道
の信徒某家計向不如意なる處より風と思ひ立大坂に出て米搗を三年間辛
抱して拾二三兩の金を餘し自國に歸らんとする時拾兩は肌につけ残る二
三兩は旅用の爲め懷中に小出して歸途に赴きたり二三兩の金も殆んど旅
費に使ひ果し僅か二分か三分かの金を持ち最早國許が近くなりければ夜
中ながら岸に此山を越へ片時も早く歸宅して久々ぶり妻子にも對面せん
と夜中に山を越へけるとさ大いなる男三人走り出で持ちし金は悉く出せ
よ若し出さずば眞つ二ツにして呉れんと刀を抜きつゝ大音聲に罵りけり
信徒某は最早逃る能はざると覺悟し旅費の餘り二三分の金を取出し此餘

に金は無きゆへ御通し下されど怒るに申ければ賊も眞實なることと思ひけん其二三分の金を奪しまし退きけり彼信徒は虎口を逃れ道を急ぎつとつくし思ひけるは我は黒住先生の門人なり豫て先生の御講辭に誠を勤むるが人の道なりと又七ヶ條にも誠の道に入ながち心に誠なき事とあり其誠を取外さぬよふにと執行してありながら有る金を無いと云ひしは全く盜賊を欺きしなり人を欺きて金銀を掠め取る事を業とせる賊を欺きたる我こそ如何なる天罰やあらん恐れ入りたることなりと思ひ跡歸りして右の賊を尋ければ遙か遠き處に三人輪つくりて火にあたりて居るものあり是れ最前の賊ならんやと近寄りて見れば果して相違なし彼の信徒

は賊に向ひ我は先刻僅の金を御渡し申せしもの也此餘に金は持ぬと云ひしは全く偽りなれば肌につけて居りし金拾兩を只今御渡し申すに依り三人分配して下されと云へは賊は欺きて我を捕へんとすには非ずやと各鞆に手を掛て身構へなしければ近寄る事能はず止を得ず拾兩の金を三人の中に擲ちけり賊は不審に思ひつゝ手に取りて見れば拾兩の金に相違なし賊は顔と顔を見合せ其儘平伏して貴殿は大師様か又は観音様にてはおわしまさずや何卒是迄の罪を許し玉へと詫ひければ我は備前黒住様を信仰するものなりと前々の事柄を具さに述べけり賊共其誠に感服して拾兩は素より最前奪ひし二三分の金も返し夫より一人は我が國許に歸りて改

心し二人は彼の信徒に隨ひて因州に行き數日を経て黒住本社に參詣し前
 非を改悟し三人共本心に立歸り夫々職業を勤むるようになりたりとぞ
 編者曰病人なるものは形を疾むの人なり悪人なるものは心を疾むの人
 也心と形との變りはあれども天地生々の陽氣を汚すに至りては一ツな
 り斯道は心の病と形の病も共に治りて天職を勤むる誠の人となり限り
 なき天地と樂しみを同じくするとは有り難き事ならずや

◎御蔭を蒙り病母全癒し不孝者孝子となる

本教の先輩者本田應之介先生或る時近在の士族の内に乘馬あり二疋共に
 病み付きたれば種々手を盡せども更に其効なく今や危き場合になりし折

柄先生は招待に預り祈念禁厭を施すと雖も何の印もなかりし故此時先生
 は改めて天を拜し居たる中に風と是れは馬より外に大切の病人ある旨心
 に浮びたれば夫より内に入り主人に對して右の次第を尋ねし處外に病人
 なしと云ふを押して尋ねし處主人も忽ち思ひ付きたるが如くイヤ老母が
 四五年こちりへ休んで居ります夫れは裏の隔室に居りますと云ひしかば
 應之介氏は左様なれば是れより先づ御老母に禁厭を施しましよと起ん
 どせられたるを主人は暫時しと引き止め先生の御心切は難有くは存しま
 すれど老母の病は倒低不治の病故最早御構ひに及ばず殊に病室は甚だ見
 苦しさ處なれば此方にて御祈念の程を願ひますと云ひしかば氏は之れに

靈 驗 集

論して如何なる病と雖とも我が一心の活るときは治りぬと云ふ事なく殊
 に大切なる親の病苦をなごりに見捨て置いて畜類の病をのみ治癒を
 願ふ事は第一に人道を外れたる大不孝の心得なりその様なる心得にては
 とても一家一身榮へ行くべくもあらずと懇ろに之れを戒しめ諭されさて
 病氣なりと云へる老人の臥室に至られければ數年來の病氣にて床をば敷
 きたるまゝと云ふ有様にて臭氣紛々として鼻を突き室内の乱雑不潔云は
 ん方無さを先生は家人に命して一々淨除し鹽水もて之れを清めたる上色
 々道話を以て心氣を静めしめ氣分を活かさしめて直ちに禁厭を授けし處
 奇しき神徳顯はれ數年この方の長煩ひも心氣頓に快く立ち上がつて歡び

靈 驗 集

居たる場合に一方よりは家僕共來りて旦那様病馬か二疋共起き上り物を
 も喰ひ出しましたと告げれば先生は厩に行きて見られしに果して馬は
 勇ましく頭を擧げて嘶きの聲をも響けん斗りの有様なりしとそ其の後は
 かくまで不孝なりし主人も大ひに感じ悟る處ありて以前に打つて替りた
 る孝子となりしとぞ

●教諭に感じて靈妙なる神庇を蒙る

美作國奥山手村に江原義三郎(該地方にては有徳の家柄義三郎氏は幾子
 にて性質温順學力もありて舊藩中郡吏を勤務し御一新後は縣會議員と
 なり黒住教の少教正になる)と云ふ人あり壯年の頃は學理にのみ心を留

て黒住教は嫌ひなれども養父母は黒住教の信徒なるが故に造酒家と成りし時も養父母の命によりて止むなく御神裁を戴き奇妙なる御蔭を蒙りし事もありけるが幕府の長州征伐の際石見國濱田落城して美作國鶴田の織は濱田の領分なるが故に濱田侯は同地に落ち参られ領内の頭立ちたる百姓町人へ御用金を命せられけるか江原義三郎も役所より呼び出され軍用金の調達を命せられけるに歸宅して奥の間へ這入何とも言はずして臥したるまゝ起き上らす家人は食事を進むれども食はず養父母も何事ならんと深く心配し今日役所へ呼び出され歸ると臥りたる儘なるは定めて多分の御用金を命せられし故ならん何様斯く氣を屈して臥り居るのみに

ては終に病をも生ずべしと夫婦相談の上近傍の清水正太郎先生は兼て有徳の聞へ高く且つ心易く致し居ける故同氏へ計り見はやと考へ清水氏へ参り前條を咄しければ何分義三郎氏を私方へ差向けなされよ本人参られさへすれば陰氣を拂ひ氣分を活し参らすべしとてなすへき様を口授しけるにそ養父は急ぎ歸宅し老夫婦は部屋に這入りし儘打ち臥して家人が食事の時に心配しているく進めけるも更らに箸たに取りされは下女等は右の趣きを義三郎氏に告げれば義三郎氏も老体の絶食には捨て置かれず起上りて養父母の容体を問ひ且つ懇ろに食事等を進めけれ共養父母の申には我々兩人は其許をのみ便りに日を送しに此頃其許か絶食して臥り

ぬれは終には死するに至べし杖とも柱とも頼みにせし其許が今死すれば
我らは老て難義すべし行先き難義を致すよりはいつそ今の内に絶食して
若き人々より先に死する方か益しなるべしと覺悟致したるなりといかに
勤めても老ひの一鐵心は回すことなりかたき義三郎氏はいろ／＼思ひ運
らすに兼て尊敬致し居る清水先生を招請し來りて論し貰ふの外なしと自
から清水先生の宅に参りたれば清水先生の曰く江原さん能く御出くたさ
れた既に此頃一寸御宅へ御歡ひに参らんと思ひ居し所なりと申さるゝに
付何も先生より御歡ひを受る事はなく造り込みし酒は二百石も痛み近年
はまん悪く因却の央へ御上よりは御用金も大救命せられ甚迷惑に存じま

すると答へければ清水先生の曰く否とよ其酒の痛みしと宣ふとを聞きて
私は御歡ひを申します其痛みこそ實に御宅繁榮の基ひ目出度き瑞相なり
と言はれければ義三郎氏は心中に思ひけるは此様なる馬鹿らしき事を言
ふから黒住は嫌じやと怒りを含み先生には異なる事を申さるゝものかな酒
を腐らして我輩は此節季か來れとも氣か氣てはなひ位ひに考へて居りま
するに何故に其れか目出度くあります先生には人の災難を嘲弄し玉ふ御
心にやと一トかど議論をする意氣込にて嚇ツとせき込んで申ければ清水
先生は莞爾として然らば御尋申があなたか酒を賣りなさるゝ時の御心構
ひは如何にそや承りたし義三郎氏はく酒も一斗とか二斗とか一時に

澤山に買に參れば宜しけれども小前の者は晩方に參り一合呉れと申又は二合呉れのと申しまづ一合遣ると温め呉れと云ひ何ぞ鹽氣なりと呉れと云い其酒を呑む内に又一人參りて一合呉れと云ふ始の者は又一合呉れと云又次の者も又一合と云ひ二三人も其所にて呑内には酔ひか回るに付けては管々しき咄しを繰り返し巻き返しつゝ後には喧嘩を始め晩方の世話敷き中にも捨てくも置かれず其仲裁を致し八ヶ間敷き故一合や二合の半した酒を買に參りねは宜きといやに思ひ升と咄ければ清水先生曰はく夫れでは酒が死物となりくさる筈でありまする教祖の神御教を拜聽すれば人は天照太御神の御分心を稟けて悉く神であると宣ひじなり依て

人の貧富を論せず総へて皆神と見て宜しし譬へ一錢のものを買に来るも商法とする難有と思ひ一合の酒を買に来るも又難有ひ神へ神酒を備る心持ちにて酒を斗りなば是則活物と成りて酒は益々上出来となるへし然るにあなたの御咄の通ではイヤく面倒なりと思へは心か死ぬる死んだ心で酒を量れば自然に買ふ人の心も面白くなければ呑む酒も死んで仕まふ賣り人も買ひ人も皆死ぬるゆへに酒も亦痛むか天理なりと申されければ義三郎氏は首を傾けて聞き居たる中に大ひに感じ何分老人か臥り居りますゆへ御出下されよと請ひければ兼て老人へ含めし方便は愛なりと清水先生は直くに江原氏へ參られければ老人は先生が御出なりと聞くや直

くに起き揚りて奥坐敷へ請待し色々尊き講話もわり馳走萬端にて日暮に及びければ序に痛みし酒に禁厭を施して上ると清水氏は酒藏へ行き桶の口を切りせ御神水を少しつゝ入れ御祈念の上呪ひを施し置き其夜は先生も泊りて翌朝酒を出し見玉へとて則酒を出し見るに清み切りて其味上方酒にも劣らぬ名酒となり居ければ桶毎に味ひ見るに皆能く直りぬれば始て義三郎氏も御神徳の尊き事を知り教祖の御教の活ものは誠と申す事を悟りに手厚き信者となり一層他の信用も篤く相成り一新後も作州に強訴起り江原を打毀せしと大勢押し寄ると聞きて義三郎氏は清水先生の許へ走り行き強訴の難を免かるゝ様御祈念を願ければ先生の曰く今貴

家を毀たんと寄せ来る人々を可愛と思はるゝか或は悪しと思はるゝかの間に義三郎氏曰罪もなき我宅を打碎く族を何とて可愛と思ふへさと先生曰ソコが道にて候そ罪も無き家を打碎かんとする人々は人理を以て論し難く迷ひも迷ひも極重の迷ひにて實に可愛さものならずやと申さるゝにアツと感し御尤も同意す然らば往きて御祈念すへしと御祈念中數千萬の人々潮の湧くか如く江原を碎けしと天に轟く凄じき聲々にて押し寄せ來りけるか誰れ唱ふるともなく江原をは碎くなくしと呼はるものあり其聲に和して碎くなくと叫ひつゝいつしか人聲遠く成り行き終に江原氏の宅へは更に手を付けず引き去りける後に聞くに三里余

靈 驗 集

脇の落合河原にて強訴の者共一と休みして先きに江原を碎くなど云ひしものわり其聲に和して碎くなくと言傳へて他に方向を轉せしか遣は誰か言ひ始めしとぞ穿鑿するに皆碎くなど云言は聞しも其言し人は更になく不審に思ひしとかや中々數千万の人々の中に聲の貫ぬくと申事は容易ならぬものなるに斯く潮の湧くか如き大勢中に其聲響き渡りて聞へけるも全く不可思議なる神助の然らしめし所なるへしと事果てと聞く人毎に其奇瑞に感じける

◎孝心と貞節との効驗

維新前後の頃肥後國狼府郡(某村)に三輪儀平といへる財産も相當に所有

靈 驗 集

じて才智學力も可なり備はりたる人ありしが儀平夫婦の間に一人の娘(ちす)なる者ありて一家三大陸じく暮しけるが人には望みの絶へざるものにて一家財産に何不足なき處より儀平は此に一ツの望み起り何卒大庄屋役に成り度きものと思ひ付き其の筋に向つて色々志願を申し込み運動をも試みしかど何分當時は門閥制度の嚴敷き頃とて義平の願ひは到底叶ふ可くもあらずして折角の心盡しも其甲斐なく徒らに水泡と消へ失せたれば義平の落膽は云ふ計りなく是れより大に不平を懷き鬱々として樂しまず胸に焚く火の修羅となり世を怨み人を嫉む心は雲霧の起るが如くひらくとして沸き來り其れより我に等しき不平の群を集めつゝ遂

靈 驗 集

に一ツの惡黨を紐み立て、爾來は役人の意に反對し稍もすれば役人を惱ましめ猶増長して果ては喧嘩口論に墮擲に飲食に女色にあらゆる惡徳邪業を働くに至りしかは外に於ては近郷の者共さなから儀平を見ること毒蛇の如く恐れ忌むに至り内に向ては財産を失ひしより一家不和となり行き果ては妻子二人を追て出して自分は自暴自棄となり娼妓上りの賤婦を引き入れて宿の妻となしければ追ひ遣られたる親子の者は泣くくも近郷の知るべの方に手續て僅かの業を営み朝夕粥の湯を啜りて細き玉の緒を繋ぎ居しが折しも其の近隣に血分にて七ヶ年此の方の長病人ありしが黒住教の禁厭を受けたれば僅かに一週間にして全快したりとの話を娘（

靈 驗 集

ちす）が聞きたれば神様に御願ひ申して父親の惡心を翻して善心に立ち返へらしめたしと其母に謀りければ母の曰ふには其れは形の上の病なれば神様に御願ひ申して治るかは知らされとも父の病は心の間違ひ故迎も本復の程は六ツヶ敷からんと打ち嘆きければ娘ちすは母上さな宣ひぞ先生のお諭しにては形の災ひは形の病惡人は心の災ひなるが形にせよ心にせよ何れとも御蔭は戴たかる者と申されました是非に信心を致し度ふありますると押し返へして願ひしかは母も漸ふく是れを承諾し其れよりちす女は熊本の教會所へ日參し毎説教日には殊に惰りなく參詣して一心に父の所業の改まるよふに祈り居りたる處儀平は此事を聞きて心中に

可笑しく思へども何様娘のなすことゆへ相手取るにも足らざれば先づ教師に對し一と談判致し呉れんものと彼の喧嘩は食事よりも好物なる悪漢の事なれば一日説教日に黒住教會所を指して出て行きければ娘のちす女は大に心配なし豫しめ教師へ其の由を通したる處諸教師等はいつれも音に聞えし手こすり物の儀平か度胸を据ゑて攻め來ることなれば各怖れをなし當日の説教をは互に譲り合ひけるが其中に熊本之士族某は唯神慮に任かして一心を極めて説教を相務めしかば一念の活氣は自然に生動して不思議にも説教は満ち渡り遂に我れと我が曰ひつる事を覺へざる程なりしが儀平は説教中突と立ち講座の下に進みけるに教師は之れを知らざ

るか如く何物をも思はず傍眼もふらす一心不亂に説き進み活氣満ちたりしか暫時して講釋終りけり儀平は其の先生に面會を乞ひけるゆへ教師は嘸ぞ此方を功學するか或は亂暴を働くならんと思ひ設け居たりしにさは無くて儀平は教師の前に首を垂れて唯「ハラ」と落涙し兎角して申し出てけるは私事今日初てお道の尊き事を知りました是れ迄の悪心を悔ひ改め今よりお道に入りて神の教に従ひ奉りますると誠心面に溢れて乞ひければ居合す諸教師は案に相違して大に喜ひ尙くれくも今の心持を忘れぬよふにと神徳の尊きこと人道の務等を説き聞かしめて別れしより儀平は大ひに感悟し是れまで引き入れ居りし娼妓上りの女をば即坐に

靈 驗 集

追ひ出し本の妻子を呼び戻し是れ迄に打つて異りたる善良の人となり以前
 前の如く家門に風波なく最陸間敷暮しけるか是の事早やくも地方新聞紙
 の（是時は已に維新後にて各地）報する處となり近郷の者等神徳の難有さ
 方新聞の設けありしと見ゆ）事を語り合ひぬ然る處同熊本市にて屈指と呼はるる金満家某に二十歳斗
 りなる嫡男ありて豫ねて妻を向へん事を進むれども更に應ずる氣色もな
 く兩親も常に心配なし居たりしに此の嫡子一日右の新聞の記事を讀みて
 ちす女の孝心にして其親を感せしめたる誠に感し凡そ世間廣しと雖もち
 す女より外に妻となす可き女なしとまてに思ひ込み是の由と兩親に告げ
 て何卒ちす女を娶らん事を請ひければ兩親も異議なく媒酌人を求め申込
 たるに不釣合なりとて斷りたるも達て所望しければ遂に縁談の約束も整
 ひて黄道吉日を選びて迎へ取らんとせしに其期に先ち右金満家の嫡子病
 に係りて當さに死せんとするに至りたれば嫡子の兩親はちす女が嫁せず
 して寡婦となるも不便なりと思ひ右大病の由を報して破談を申し込みた
 る處ちす女が申すには不肖の妾を左程迄に御親切に思ひ下さる事は誠に
 有難く存しまする況してや一とたひ吾が夫と定めし上は如何様の成行に
 相成るとても外に夫は一人もありませんと申し切りて其破談を受け入れ
 ずして其の夜直ちに夫の家に至りて病床を見舞て夫に會ひたれども何分
 にも大病にて性命も實に危き場合なれば言葉も通せざる始末故ちす女は

靈 驗 集

直ちに黒住の教會所及び産士の神の社に至り肚前に額突き一心不亂に夫の全快を祈り居たりしが一念至誠の神明に通しけん夢ともなく現ともなく最とも幽かに夫の病ひは平癒すへしとの神告げと欲ばしく自然と胸中に感透しけるにそらず女は天に歡ひ地に悦びわら難有やと手足の踏む處をも覺す急ぎ夫の家に歸へり視るにわら難有きかな病者は次第に吐く息も太くなり行き漸やくにして元氣も生じたるよふなれば病者に就きて心得如何にと尋ねければ始の程は非常に心地悪しく覺へたりしが稍々時をふるまゝに最も馳しき道を飄々として行くかと思へは忽ち宛ある山に到り生へ茂りたる樹木と別けつゝ登ると覺しき時に風と一人の氣高き老翁

ありて此所には汝の來るべき處にわらず速かに返れよと教へられしに心付き唯難有く覺へて早速歸へり路に就き我家の門口に着きたりと思ふ頃しもふと目の覺めたるが如き心地致し今の次第なりと語りたり病者の語る所と云ひちらず女の神告と云ひ彼れ是れ思ひ合はざる事のみなれば實に皆神徳の然らしむる處ちらず女の至誠より斯かる御蔭の顯れしなるべしと家内一同難有き事肝に銘し唯々感涙に咽ふのみなりしちらず女の實父と云ひ今又其良人と云ひ重ねく斯く御蔭を蒙りけるゆへ本人は素より之れを見聞せる人々はいづれも信心怠りなかりければ日ならずして病者は全快なし目出度ちらず女をも娶りて其家は申すも更なり富家なる儀平氏

も爾來家運目出度一家親族相共に繁榮むけること

◎形を忘れて肺疾全癒の神庇を蒙る

岡山縣備前國上道郡御休村大字吉井に於て鹽製造を業とせる西岡惣七と云へる人あり此人不圖眼病に罹り遂に不治の盲目となり最早此上は神佛に祈り其徳を仰がんと思ひ付き夫れより第一番小豆島八十八ヶ所靈場を初とし四國八十八ヶ所を巡廻し弘法大師へ祈願せんと用意中高弟時尾先生に就きたる手厚き教師難波要吉なる人ありて我が教祖神の御教を説き諭されしかど同氏は頑として聞入れず遂に小豆島に渡り小部村なる不動祠へ詣で夜籠の修行をなせしに其夜殊更寒氣甚たしく且つ深夜の寂寞に

靈 驗 集

靈 驗 集

堪へ難く天明るを待ち兼ねたりしが漸く明け行くに従ひ慄然たりし寒氣も漸次暖かになり今迄の物寂しかりしも忘れ何となく賑わしく思はるゝに付き思ふ様我が郷里に於て難波先生の御諭の時「凡そ天地の間に生を受くるもの 天照大御神の御徳に依らざるものなし」との御諭ありたりと沈思せしが昨夜甚だ寂しかりしも 天照大御神の東山の端に御登りに相成るに随ひ淋しさも亦寒さをも恰も夢幻の如く打忘れしと思へば實に不動様の御蔭よりは天照大御神の御徳こそ遙に優るを思ひ當り夫れより四國巡拜及小豆島靈場巡拜等も思ひ止まり我が郷里なる難波先生に従ひ御道の修行を爲さんと直ちに踵を廻らして歸途に就きたり而して吉井川

五十四
迄歸りし時杖笠を始とし札挟み其他巡禮の用意にとて持ら居たりし所持品をば残らず河中に投じ巡禮の姿を更め我が家へも歸らず直ちに難波先生の宅に参り以前御論じに相成りしをも打捨て意に小豆島へ渡り小部の不動の夜籠りの時の思想を漏れ無く申述べ前非を悔ひ心を一洗し之より御道の修行致度と申出でしに先生の悦び一方ならず夫れより先生の教訓を受け我教の何たるを知りお道の修行を爲し居たりしが難有き哉一週間にして彼の不治の眼病も春霞の徐々と晴るゝか如く晴眼となり夫れより御道の尊く且ツ有難き事心魂に徹し地方に於て屈指の信者となり居たり然るに我教祖の諭し給へる難あるは形の持前云々どあるか如く此の惣七

又々肺症に罹りたり然るに同氏は物の數とも思はず醫師にもかよらず打ち捨て只有難く暮し居たりしか病は次第に重り已に立居も自由ならず遂に病床に伏すに至りたれば家族は云ふも更なり親族の者等醫師の診察を受けん事を勧めしに少しも意とせず居たりしが益々病症重さを加へ遂に親族の者より醫師を招き診察を受けしめしに已に兩肺とも助くるに道なしとの事に親族家族の驚愕一方ならざるに本人なる西岡氏は平然として病氣に頓着せず只難有き事のみ話し居たりしに家族の云ふ様此幼少なる子供等を捨て措き死せざるを得ざる難病に罹りしは日頃の信仰も水の泡なりと嘆きければ同人の曰く余は有難き御蔭を蒙りたり病は是迄風

邪と思ひ居たりしに豈計らんや肺病と聞しより一層有難き事相増したり
 と拍手して悦び若し吾れ御道を信仰し居らされは此病の爲に一命を落す
 べきに有難き事は 教祖神の御教の隨に――「生通しの道に身を任せ有
 無生死を離れ候得者死と申す事は更になし」と承り其通に信仰致す故
 少しも氣遣の事なしと喜び勇み居たりしに病症は次第にさし重り已に危
 篤なる場合に立ち至り母親が梨實の薄く切りたるを口中に含ませしに咽
 喉を越す筈なく然れども斯く衰弱せる有様を母親に見せては心配を爲す
 ならんと口中に含み口外に出さず其日の晩に至り其妻指を口中に入れ梨
 實を取出せし程なり夫れより引く息も出来ぬ突く息計りに至りしとさほ

實に餘程の苦みを覺へ其時思ふ様教祖神生通の道と御論に相成りしは何
 れのものなるやと或御書簡中にも「道にさる居申し候へば危き事御座な
 く云々」とあり吾は道を取り外して居るにやと心に願みて穿さくする氣
 になりしに益々苦み甚だしく其時御神詠に「身も我れも心もすてと天地
 のたつた一ツの誠ばかりに」とあると思ひ出し是は有難き事なり息の出
 來ぬも世話にも及ばぬと思ひ其時有无生死を離れ天地に身を任せしに其
 儘苦痛を忘れ前後を覺へず快寐なし暫くして不圖眼の覺めしに前の苦痛
 は恰も夢の如く薩張打忘れ妻に向ひ誠に有難き御蔭を頂きし様に思はれ
 また夢かとも思はると様なるが如何なりやと尋ねしに妻の云ふには夢で

はなく幻なりと答ふ夫れなれば煙草を吸はせよと申して煙草を二服吸ひしに誠に快く又何か喰ひたしと云ひ饅頭二個を喰遂に茶漬二椀を食せしに至極快く誠に夢見る如くにて皆人の恐怖する肺病を其儘忘れ壯健になりしにぞ斯る鎮魂の人は稀にして御神徳の尊さは申も更なり廣く世上に公に爲したり這は本教々師時長氏より通信の事

◎少教正大西定一氏靈驗口話の筆記

備前國邑久郡國府村大字磯上九十番邸高原岩吉妻民女四十有余の頃三女出産の節難産にして既に四晝夜の鹽疾にてから兒となり尙服痛彌甚しく精神も錯亂するに至り因て醫師和氣郡香々登村加間某を招き診察と

受けしに胎兒を切斷して出すの外術なし此儘に爲す時は母子共見殺なり切斷する時は助るならん然し受合難しと云主人決心の末切斷術を頼みければ然れば助手を要すとて他の醫師を招きけり此時主人岩吉心付同村の黒住教訓導安木又吉氏を聘し祈念を乞ひしに安木氏直に參られ産婦に言けるは婦人として子を産むは天賦のしからしむる處なり其大切なる勤めを我か事の様に思ふは間違なり婦人として産をするは最大貴重なる天の御用なるを此如き難産するは其重き御用を忽にして居る故也此御用を務めさせ賜はるは其許において誠に有難き極なり然し今苦悶の際なれば耳にも入る事難からん余其許に代り天へ對し御斷申上るに付心を充分大切

にせられよと云置き天拜をなす神拜修るや醫師は今や術に取掛らんとす安木氏は暫時御待下され直に濟む事ゆへに一應禁厭を施さんとて一心に禁厭を授けしに穴尊さや不思議なるや茲に四晝夜間の苦悶も一回の禁厭の下に何の苦もなく直くに玉の如き子を出産したりき居合たる人々唯難有事と拜伏するの外なし醫師は手持不沙汰に切斷器を收めて歸りける此民女は是迄男女五人の子を生みしも毎も産癖悪敷生死を争ふ程なりしも此時に限り出産後も殊更速に肥立たると云ふ

因曰安木又吉氏は豫て聞く處あり泉州堺市西二丁帆屋絹女と云人黒住信徒の内最も有名の篤志家にして時々禁厭を授與する内にも妹難産し

鹽疾七晝夜に及既に切斷の場合に至りし時妹どに諭しけるは女子として産をずるは天賦の御用を務むるものにて誠に難有事にあらずや婦人として天の益人を殖すは天の御用も重大なる事なれば難有尊き事にあらすやと諭し禁厭を授けられは直くに安産せしと云ふ嘶を聞居り腦裡に納め難有く修行せしに斯くの如き尊き靈顯ありたるものならん

◎神歌に依り御蔭を受く

先年備前國兒島郡手島元庄屋藤原助右工門妻かね十九歳の時より三十歳までの病氣にて有名の醫師方の治療は素より神佛の祈念等も種々手を盡せども更に全快致さず追々衰弱して如何とも爲ん方なき所より赤木忠春

先生を招請して御説教禁厭を願ひ右かねの申すには先生也も今度は本復は致しませぬ然し寝たり起たりしてもとふぞ四十二の祝まで活きて居りたく存じますると申したれば先生曰く左様に限りを付る事は宜敷くなひ活死も富も貧苦も何もかも心一つの用ひやふで我心に思ひし通りに成りますから必ず限りを付ぬ様に何事も大御神へ御任せ只心を活しなされと委敷御諭しになりけるが折節箒紙が熨斗包みの如く折りて箒を入れありし紙を先生のし給ひ「ありかたやあら嬉しやと喜べは寄りたる皴ものし進上」(かねは十二ヶ年の長病にて年寄)と記して遣し玉ふかねは是迄になく快く覺へて心から有難やあら嬉しやと喜ひけるか日ならずして全

快し今まで長く煩ひ家内の世話に成りし恩を報ひんと家事を働さ八十五六に成りても壯健にて日々難有く暮しけるとかや赤木先生の御説教禁厭にて万死を變して長壽し貧を去つて富裕の身となり種々様々の靈驗を受けし人は今尙存命して幸福を享けつゝある人々多しと云ふ
 編者曰天地と共に氣を養ひ面白く樂しく心にたるみなさやうに一心か生きるも人も生きるなり生きる大神の道面白さが大神の御心なりと
 教祖神は宣はれたるか本文の如きは面白く氣分を活し教祖の御言辭の場合に叶ひしものにて斯る靈驗を蒙りしものなり

◎孝子賞を受く

靈 驗 集

備中國都宇郡茶屋町大字早島新田四拾六番邸植野兼吉妻事女は明治三年の頃植野利衛の養女となり兼吉は明治七年の頃入贅となり夫婦共養父母に事へて孝心厚く家内睦敷暮しけるに全九年秋頃より養母リツは僕麻質斯病に罹りて總身激痛し醫者よ祈禱よと種々手を盡せしも更に其効なく全十年春に至りては病勢益々劇しく全身不隨となりければ夫婦の者は晝夜寐食を忘れて看病手厚くなせしも患所の痛み甚しければ夫婦の心痛一方ならざりしが不圖黒住教に依れば御蔭著さと聞き直に教師の方を招待し禁厭を受け説教を拜聴し道の尊き事神徳の難有き事を聴聞し直に神文を捧呈し夫より本教を尊神し手厚く相勧め孝心の誠を以信仰せしが御

靈 驗 集

神慮に叶けん明治十二年春忽ち病氣快方に到り薪炊の手傳孫の見守り等をなす程になりければ御神徳の難有事を尊み歎ひ居りしが養父利衛又發病し禁厭醫療等種々力を盡せしに一時は靈驗ありたるも天命にや遂に黄泉の客となりたり家内の歎き大方ならず斯くて家貧困の中なるも葬祭は鄭重に執行したり該費用と爰に養母長病の爲め費へ多く活計愈困難に陥りたるも夫婦共甲斐々々しく職業を勵み老母に孝養を盡し又女兒等の教育にも心を用ひしが神明の冥助にや農作物は素より其他の収利多く漸次に従來の負債等をも消却し活計以前に恢復したりき斯く職業に勉強せる余暇を以て布教に盡力し患者あれば祈念禁厭等を施して親切に取扱を

靈 驗 集

なせり然るに明治二十年頃より又々養母の病痼再發し屢危篤に頻せし事
 あるも常に靈驗を戴き九死に一生を得たる事も數多なり然りながら數回
 の病に身体不隨となり今尙病褥にあり斯く長病なるに象吉夫婦は看病少
 しも怠なく或る時は御道の難有事を話し又は珍らしき世間話等をなし常
 に精心を慰め食物は時々品を換へ意に適するものを供し衣類夜具等は精
 潔にし他家より到來の品ある時は必ず先づこれを母に供す四才の小兒も
 克く見做ひ老母に供したる後にわらされば之を食せず老母常に人に語り
 けるは妾病氣に罹てより以來既に二十年餘病床にある事十二年餘の久し
 きを經剩へ家貧困なるにも拘はらず養子夫妻共晝夜大切に孝養致すに由

靈 驗 集

り少の不自由なく難有專言語に盡しかたし是が眞の極樂なり高天の原な
 らんかと存歟す眞の實子もこれには及びませんと嬉し涙を浮へけるとな
 り至誠は官の知らるゝ所となり本縣知事は左記の通費せられ猶地方信徒
 有志家相計り兩人の美德を頌せんと管長の染筆を乞受け是を額となし贈
 與せりと

岡山縣都宇郡茶屋町大字早島新田

植野 柔吉

天資温厚養父母ニ事ヘテ孝養忘ルコトナク曾テ植野利術ノ養子トナリ
 テ克ク一家ヲ齊ヘ明治十年以來養母ノ宿痼ニ在ル事前後十有貳年加フ
 ルニ其間養父ノ病患ニ遭遇シ家計困迫ノ中ニ在リテ看護ニ盡シ就中養

母ノ病体常ニ自由ヲラサルヲ嘆キ夫妻ト共ニカヲ協セ藥餌其他ノ佳味
ヲ供シ養父ノ亡歿ニ臨ミテハ其吊祭ヲ重ス其行爲ノ深キ茲ニ二十年餘
志操一日ノ如シ洵ニ奇特トス依テ爲ニ其賞木盃一組下賜候事

明治三十一年四月八日

岡山縣知事從四位勳四等 高崎親章

岡山縣都宇郡茶屋町大字早島新田

植野 象吉妻

橋本 事

資性柔順養父母及夫ニ事ヘテ孝貞ノ志深ク曾テ植野利衛ノ養女トナリ
能ク家風ヲ守リ明治十年以來養母ノ病褥ニ在ルコト前後拾有貳年加フ
ルニ其間養父ノ病患ニ遭遇シ家計困難ノ中ニ在リテ克ク夫ヲ輔ケ共ニ
看護ニ心ヲ盡ス其行爲ノ厚キ茲ニ二十年餘志操一日ノ如シ洵ニ奇特ト

ス依テ爲ニ其賞金五圓ヲ下賜候事

明治卅一年四月八日

岡山縣知事從四位勳四等 高崎親章

◎一心決定の效廣大の御蔭顯はる

埋木も枯木も芽出し葉も榮へ花も榮ゆる御代の春哉と詠したる歌あり精
神一たび到れば何事が成らざらんや精神の到る所石にも矢が立ちしと云
へり是教祖の神教へ給ふ所の心を活して用ゆる所ならん爰に鳥取縣下氣
高郡美穂村大字上味野村四十七番地岸本庄次郎長男敬藏なる者明治九年
一月頃より大病となり全村の醫師大野鉄也氏の治療を受しも寸功なく依
て他の醫師と協議配劑する事に決せし折柄全村大字向國安村縣會議員林

至誠氏の實父林治郎左工門氏大患にて八頭郡大字圓通寺村醫師岸氏の治療中なれば岸本氏は右林氏の宅に至り岸氏に倅敬藏の治療の事を依頼し其後は醫師の送迎を林と岸本の兩家より隔番に致し居りしに二月頃に至りて病人は九死に差迫り迎も快氣覺束なく岸大野の兩醫曰く十日までは壽命保ち難しと斷言せり然るに十二日に至るも氣息奄々として取續きければ父庄次郎は全日午後五時頃林氏の宅に行きしに岸氏は今しも歸らんとせられし際なれば敬藏の容体を陳述し速に來診を請ひし折柄其宅より庄次郎の友人二人飛が如く駆け來りて敬藏は今死去せりと告たり依て岸氏は御氣の毒ながら已む事を得ずとて別を告げて去り父庄次郎氏は涙乍

ら歸路熟々思考するに昨年兄仲谷榮治の妻ます女九死の大患にて治療も盡き醫師も手を放したりしが岩美郡富桑村大字行徳村松本先生の禁厭を受けて全快し廣大なる御靈驗を受たり然れば靈驗を受るは彼我の別なし我も神明の御蔭を受なば直に蘇生するは疑なし一心決定して歸宅せしが家族は元より親戚隣家の者共寄り集ひて悲哀展轉慘烈の情を極め居れり神棚には戸を閉ぢ紙を張り悔み旁々來訪する者續々たり然るに庄次郎氏は妻いのに向ひ敬藏は死たるにあらす永らくの病氣の疲れにて寢入たるなり必ず死たりと思ふなかれ夫の意に隨はざる節は汝ら離縁すべし必ず心を大丈夫に持べしと堅く注意し神棚の戸を開き燈火を照し一心不亂

に神明に祈願を込め人を以て岩美郡宮桑村池原左次郎先生を招待せしむ
 全夜は鳥取市荒尾垣就教正宅にて因幡國信者の集會ありて來られず又翌
 十三日午後有田甚五郎を以て伺はせたるに折悪く隣家に大患ありて無止
 と斷られ又々十四日早朝福出善四郎を以て再三依頼せしに今少しにて隣
 家の病者死活の別相見ゆるに付午後無相違御伺可申との事にて使は歸
 來りたり岸本敬藏は以前死去せし事たれば續々悔に來る者あり双方に近
 隣の人集りて各々互に相語りけるは扱も岸本庄次郎は困りたる次第なり
 愛兒を失ふたりとは言乍ら此く狂氣せしは氣の毒千萬なり人々能く注意
 して早く埋葬致させては如何と種々埋葬の事を申込者あり氣狂だくと

言傲し隣村迄も狂氣と言傳へり然るに十四日午後三時頃仲谷榮治氏は池
 原先生を同道して來られければ庄次郎氏は大に喜び禁厭乞ひければ敬藏
 の死体を是非共御禁厭を授けられよと乞ひければ直に祈念をなし石の如
 く冷凍り已に枯木同斷なる死体に向ひ禁厭を授けられしに吹撫での手の
 下に突然目と耳の間米噛みの所に聊温氣あるが如きを認め先生も聲を揚
 げ御陰顯はれたりと天にも達するの勢を以て十六卷の御祓を執行し禁厭
 を授け御陽氣を息吹きかすれば敬藏は三日目の午後六時頃總身に熱氣を
 生じ直に大聲を發して泣き間もなく乳を呑みたり是れ十一日目なり其
 坐に居合すもの覺へず感泣の聲を發するあり思はず喜悅の聲を發するあり

り此泣聲と笑聲隣家迄に隘れ轟きたれば近隣の人々は只有難し〜とて
 悦び駈け來り集へるもの夥しかりし此靈驗が御道の龜鑑となり全村は素
 より近村まで神文を捧呈する者多々ありし岸本庄次郎氏は家族一同神文
 を捧げ終に本教の教師となり農事多忙の時も顧みず東奔西走して御道の
 爲め大に盡力しつゝあり御神歌に（生き死も富も貧苦も何もかも心一
 の用ひよふなり）と宜なるかな敬藏は一時全快して其後至極強健にして
 生育し一家も繁榮に赴き實に廣大無邊なる御蔭を受けたる義遠近に聞れ
 なし

◎起死回生の神庇を被る

此一扁は熊本中教會所々長佐久間教正の神徳靈驗記にして之を投せら
 れたるは福岡縣宗像郡赤間村黒住教小教會所田中仲吉君なり
 予は明治十二年六月廿二日布教擴張のため熊本縣芦北郡日奈久町郵便局
 兼旅客商なる江口克己の招請により該地へ派出し全家の二階二間を借
 受け全廿三日より向一週間説教を行ひたり其開會式には地方神官上柿千
 尋氏等も來會し有志者よりは奏樂の奉納等あり頗る盛大なりき前講上柿
 神官、後講は佐久間にして夫より引き續き説教禁厭等を日々相勸め居り
 參拜者も毎日三十名餘り有之候斯くて全廿七日の夜十二時頃本教信徒な
 る南種知表口を叩きて予を起し申す様自分方出入のものにて全町に住居

する漁師安兵衛と申者十七八日細川家の元家老尾藤閑吾殿の件にて海漁に赴きたるに殊の外の大漁なりしかば尾藤家よりも酒肴を賜はり大に酔酩しけるに如何なる機なりしにや便所の側にて右の足の平を三寸五歩許りも切込み其當時多量の出血もありしが大酔の折柄左程の痛みも覺へず煙草の粉など捻りつけ其儘翌日まで打臥たるに翌午前十時頃に至りて忽ち傷口の痛を増し且破傷ため股より足の指まで膨れ上がりて全身の苦痛云はんかたなく醫師三人も立合ひて種々治療を施すと雖も少しの験だも見へず土産神社へも神宮上柿氏に三日間の御祈禱を依頼しさまぐ手をつくしたれど何れも其甲斐なくして當廿七日午後十一時頃息絶へたり然る

に家内には六十八才の老母及び三十五才の妻との外に十二才を頭は三人の小供あり家族五人のものども途方に暮れて泣き叫ひ居り候はれ願くは御神徳を以て彼等を御助け下されしと申す故兎も角只今より全家へ罷越すべしとて南氏に伴はれ全家へ派出す時に家内五人の者及親族の者打寄りて死者の枕頭に泣き悲み香花を手向け枕鐘をたゞきなどし其さま誠に憐なり予は並居る人に種々説諭を加へ人の命は天にあり之を守り給ふは神なれば生死共に神に任せるの外はなし予今より祈念をなし且禁厭をも授けんとて早速神棚へ神燈を照し三度の神言を奉讀し夫より遺骸に向ひ一心になりて禁厭を授けくるに少しの体温は残り居る様なるも四肢

は既に冷却して禁厭後も何の驗見はれず此に於てか予は尙ほ人々に向ひ
 て人の誠は天地は素より神々も照覽遊はされる事ゆへ誠を以て神を祈ら
 は必ず驗ある事疑なしユメ／＼迷ふべからず歌に「御姿のなさと思ふは
 迷なり拜めばこゝに宗忠の神」とあり又教語にもある通り疑と憶病とを
 離れば御蔭はなきものなればと懇に説き諭したる上午前三時頃歸宿せ
 り歸宿後も猶御祈念を疑し神言三十度計も奉讀したる後休息せりやがて
 其夜も明け翌廿八日午前九時頃とも思ふ時分宿亭江口氏と共に朝食を爲
 し居る所へ安兵衛の妻参り手に黒き徳利を携へたるまゝ上り口に腰を掛
 け大音揚げて頻りに泣き先生御蔭を頂きましたと絶叫す依りて江口氏と

共に其仔細を尋ねけるに夜の明方に至り俄に四肢を動かさず一聲高くあり
 がたいと叫びし故家内何れも大に驚き一同其側に寄り集りて様子を見し
 に明に兩の眼を開き口さへきゝて難有／＼と申し續け夫より食事を需め
 て今方少しの食事さへなしたれば不敢取御禮かた／＼御知せに参りたる
 なり願くは再び御出下され度と涙と共に申ける故予は江口氏と同道して
 直ちに安兵衛方へ赴きね此時前夜の死人なりし安兵衛は床の上に起きて
 大に悦びの色をあらはしさて申すやら前夜息絶へたる時は夢の如く綱を
 肩にかけて毎の如く漁に参り戸口を出でて西の方三町許り行きしと思ふ
 時家内の者頻りに呼び返すゆへ何事なるやと恩ふ内にふと草木の生ひ繁

りたる山に出でたり此處に五人の神官とも思しき御方整然として裝束を着用せられそが中の先に立玉へる年の頃七十才許の御方より汝は何故此處に來りしやとの御尋ねなり自分は只頭を下けて畏り居候處汝は未だ此處へ參るべきものに非ず疾くもとの道に引返すべしと仰せられ畏れ多くも其御方自分の手を取り玉ひて戸口まで連れ還り給へるよと思ふ途端眼を開きけるに我家の内に臥し居れり云々と其難有たさに感ずる餘りはるくいと涙をばし物語りければその座に居合す一同の者共も皆九拜百拜して御神徳と尊み恐み其ありがたき事を肝に銘せぬものはありざらんて安兵衛は夫より後も日々御蔭をいたして終には無病健全のものと終

に復したりいとも有難き事になん

◎一心決定肺病忽ち平癒す

岡山縣英田郡大吉村

天心 阪 東 正 光

小生去る明治廿三年の春初て幽現一致人心脩正の行爲を發願し其の爲御祓講を起し去る卅年迄に八年の間に一百万巻にみち入社せし人員は殆んど三千人の餘となるに至れり然るに小生自宅より東三里餘西粟倉村大字長尾松本三郎兵衛宅に於て千度祓を開きしが其夜小生不圖肺を痛み十二日間臥尊せし處へ隣家なる建元爲藏なる人病氣に付強て招待せられ止なく參り所念致し其翌日朝亦頻りに肺を痛臥しながら熟思ひげらく吾御祓

靈驗集

講の發起者となりて一百万卷にも満ちる程御祓を献誠せし位なるに已が胸中に雑念を催ふし肺を痛むとは入社信徒へも面目なし此度は如何なる御神たちの御練にあづかるか又此御試験に如何にもして及第せずばあるべからずと思ひ定め我は何神の末孫なるも判然せず思ふに一人の親は二人なり之を倍掛にせば十人元の親千〇二十四人に上る然れば 天照太神の末孫の親ありと決心を定め即ち我は 太神の末孫なりと思ひ我實母より 天照太神へ牛根の蔓續きたり我は 天照太神の産の孫なりと思ひ定めたる所は心持ち爽然として何となく開豁になりて其夜は快く相成安心に眠りたり其時の夢に自宅に於て大會を開きし所白髮の老先生十人餘神

靈驗集

前に御拜あり中に國米教正御一人見覺めるのみ何れも御高德の先生と伺はれたれば夢心に大に喜び臺處に出て實母に接待方を相談せしに母曰く其方は奥へ行きまして先生の接待をすべしとて小生の両手を取りて母が禁厭をして遣るとして胸先を始め総身へ御陽氣を吹きかけしに其御陽氣身体に満ち渡り俄に快く成りたりと見て忽然として覺めたり起上り見れば肺の痛みも直り雑念も去り身体健になれり此時恰も午前八時なり是れ全く一心を改め誠の一念に立ち返り思慮雑念を息吹き拂ひたりし至誠の致す處なるべし最も尊き事なり

編者曰教祖神(我姿尋ぬるに又及ふまし只天地に照り渡るもの)と詠

し給へり天地に照り渡るものは日の神なり教祖神天命直授の神傳を得
給ひしより日の神と御一跡なる御高德に進み給ひしゆへ人々誠の一心
になりて神に任せ奉る時は或は靈夢に現れ或は御姿を現はし給ひて不
治と定めし難症をも救ひ助け給ひし其例少がらす尊き事ならずや

◎神徳に依りて蝗除去す

若狹國遠敷郡日名田村大字須繩

西本半右衛門

右は天性質朴にして日々己が業務を大切に勤め朝は早く起き夜は遅く寝
ね只一心不亂に家業に勉勵せる人なりしに神徳の尊きことは夢にだも知

らざりし然るに同地方には此頃蝗非常に發生し稻を害すること甚しく
百方驅除法に手を盡すと雖も中々除去すること能はざるに依り本教小瀧
小教會所に於て虫除祭を執行せられ其守札を衆信徒に配布せらるゝや各
守札を竹に挟みて田地の中央に建てしが蝗はいつとなく去りて跡形もな
きよふになりたり其評判世上に高かりき扱茲に同人の田地にカイップレ
(方言)と云ふ虫發生したり豫て勉強家の同人なれば終日之れを捕るも容
易に捕り盡すもと能はず虫は漸々繁殖して終には稻株をも全く枯し盡さ
んとするの勢なり是に於て同人も力盡きて此上は御神徳に絶るの外なし
と一心決定して同村權少講義池田某の宅に往き虫除の守札一跡を請ひ受

け衆人のなやし如く田の中央に竹に挟みて建て置き拍手再拜して歸宅せり翌日田に行きて見れば不思議なるかな既に稻を枯さんとせし多くの虫は殆ど無きが如き有様なれば同人は大に驚き只感涙に咽ぶのみ是に於て彌神徳の靈妙なるに感じ入り直に小濱小教會所に御禮參をなし右の始末を物語りしとぞ實に尊き事となりずや

◎神庇を蒙りて數回の病氣災難を免かる

伯耆由良 山田長太郎 投

余が家祖父の代より本教に入門し久米郡下神村の教會所の下に屬し信仰いたし父清次郎は該教會所が新築遷坐式の時は數千の信徒の中に就いて

撰まれて幹事となり金穀收支の事務を擔任し信徒中に指を屈せらるゝが如き手厚く務め居りたりし然るに所長牧野清身先生の神退れたる後は突然該教會所寂寥の態を呈したる時に際し遂にいつしか余が家も家事の繁劇等を取紛れて信仰手緩くなりたる處信仰手緩くなれば隨て御道に外れ易くなりそこで夫れ相應の酬ひの自然に萌出するは理の當然にして爰に其罪に課するに天は一の執業を以てせられたり去る明治二十五年五月頃より咽喉の痛を感じ咳付き未だ病の床には伏せられざれども何分仕事息り勝になり日々快治するを待つと雖ども矢張仕事怠儀なるを以て近隣の醫士へ療治を乞ひ服藥する事九ヶ月に到る然るに夫れとて効も見えざり

ければ考ふるに到底地方の醫士に充て委せ居れば身体は次第に衰弱し病
 の治るも覺束なし躊躇すべきにわらず有名の醫士の診察を受くるに若か
 ずと意を決して當地より十五里を隔つる鳥取縣立病院へ入院し醫學士た
 る院長の診察治療を受くる事に思ひ立ち今迄村役場の書記を務め居りた
 りしが斷然其職を辭し劇務を執りたる身をして閑散ならしめ専ら療養す
 る事になさんとしたり夫れより其職を辭し旅裝途に上り該病院に入院し
 て診察を受けたり其診察に氣管支加答兒なりとそこで余は甚だ安堵愉快
 を感じたり他なし余は若し其診察をして肺病ならしめば不治の症たるを
 さすかい其病名を案じ居りたりしなり夫れより入院治療を受くること十

日許り而して尙病名を確かめんとし幸ひ鳥取の私立の伊藤病院へ有名な
 る醫學士伊藤隼三氏(今札幌病院院長)全院長として歸鳥せられたるを以て
 就て診察を受けたるに前と大同小異に付き尙は安心し病も次第に快よく
 感じたる處長逗留せは經濟にも關係し亦處方箋を貰ひて其れに據つて地
 方の藥局より藥種の調合を致し貰ふは別に藥味の病院の藥局と地方の藥
 局と差あるにはわらず自分の家にて療養することを得策ならんと思考し縣
 立病院へ願ひ處方箋を受けて歸郷し専ら身を閑散の地に置き該處方箋の
 通り二里半を隔つる倉吉小林藥局に調合し貰ひ服用すること數月に渉る
 然れども神速に効顯われず困り果て甚だ苦になり疑を出し思ふに氣管支

加答兒のみなりとせば斯く久しく療養せずとも治すべきものに不慮は
思ひ難念は次第に廣る出でたり然し其病を捨て置く事もならず又々明治
二十六年二月より地方の名ある醫士に治療を頼み服藥中或る時其醫士に
向ひて病名を問ひたる處答えて曰く氣管支加答兒なるも肺に故障を起さ
ざる様に肺の鞏固となるべき藥劑をも調合すると此言余をして甚だ疑惑
の底に沈淪せしむる事となりたり余は素より神經過敏の質なるを以て其
言を以て推測するに或は醫士が肺病たるの診察を下して而して其診察の
通り肺病なりと對座の上にて答ふる時は余は其不治の症に罹りたるを
落膽するを慮し氣の毒がりて此の如く濁りたる言葉遣ひを爲したるなり

んかと夫より引續き其治療を受くる事殆んど百日然るに咽喉の痛咳は依
然治せず身体は次第に衰弱し困り果てたり干時我が由良宿全科醫杉村五
百藏氏が開業の中途にして尙醫學研究のため東都に遊ひ今の軍醫總監醫
學博士佐藤進先生の門に入りて我々汲々其術を鍊磨すること一年餘にし
て廿六年五月歸郷せられたるに遭遇し更に全氏を訪ひ其診察を受け病名
を問ひたりしに全氏の曰く何分未だ顯微鏡を購求し居らざるを以て確乎
たる診察を下すに苦しむ然れど他分肺結核と診察せりと余は其言を聞
くや朦朧として家に歸り落膽維れ谷り孰々思ひ廻らずに身不治の病に取
結び眷族と相見ゆるの間は最早數月の間にして而して黄泉に旅だちせん

九十一
か老ひたる祖母を始め其他の悲歎及妻子の行末等案じられ奈落の底に沈み果てし思はず涙を絞りたり眷族は余が其病名を話して落膽じたる様子を見て余が落膽せざる様彼是ど力を添え呉れ各上部は元氣に言ひつくるを余は頭を上げて知らず是を見れば各目には涙を湛へ愁歎せる情推するに餘りあり余は却て其涙を湛へ居るを見て爲めに尙一層の悲歎を増したり斯る悲歎は其境遇に立到らざるものゝ推測の之れ及ばざる處なり而し猶すれば善き思案も出するものかな茲に突然本教の尊き事を思ひ出し孰々考ふるに余が祖母は頓死の場合御蔭を受けて八十歳に到るも斯く健康に働作なし其他難病の御蔭にて治りたるの例は枚擧するに遑なし是れ

八
こそ一心と定め天照大御神教祖の神の御徳を戴くの他途なしと始めて覺悟したり嗚呼此日は如何なる吉日なりしか是即ち信仰の手緩くなり自然御道に外れたりし罪課の漸やく期滿となりて遂に不治とせる處の病症の治すると共に尙種々の廣大なる御蔭を戴く事を得るの依て別るゝ處なり故に此一思案を以て余が奈落の底に沈みたる心は忽ちにして消滅し此の上もなき爽快を感じ思はず雀躍したり却説祖母は今を距る三十六年前病に罹り二十一日間口に入るゝものは湯と水にて最早衰弱の極度に達し既に醫師も手を放し死は旦夕に逼りたるに幸ひ入門して手厚く務め居りたりしを以て天は御憐み給ひ其命の旦夕に逼りたる日下神村教會所牧野

先生御出でになり言さるゝには此頃河村郡小鹿村(當村より五里半あり)に招請せられ逗留中不思議の事もあるものかな昨夜御神告あり其神告に由良の病人の命はもう明日か明後日迄かない汝早く歸て助けて遣れとの事にてありたるを以て本朝早々取るものも取敢す歸りたる譯なりと其れより御祈念に取掛られたる處其日より病次第に治り遂に十日立ぬ間に全快したりとて御神徳の難有さを常々祖母が話すを肝に銘じ居りたるなり夫より余は本村より一里餘りなる逢東小教會所へ參詣し詰員權少講義(今は少義講)佐伯茂市先生へ御祈念を願ひ御禁厭御神水を戴きたるどてる甚だ爽快を感じ夫より全教會所毎月三回の會日毎に參詣して説教を聽

聞し御禁厭を戴き次第に御神徳の難有さ胸に徹したり其難有さの胸に徹するに随ひ病は薄紙をはぐ如くに平愈して遂に不治の病とし命數月の中に迫りたりと思ひし身は壯健となりて廿七年十二月亦山良村長の誘めにより村役場の書記に復し租稅事務を擔任し家の本業たる煙草製造及質屋等の繁忙なる業を無病に勉強することを得るに至れり誠に廣大なる御蔭を受けたるの難有味は筆紙もて盡し及ばざる處にして其境遇に遭遇せざるものゝ豫想し能はざる處なり夫より心に盟ひ逢東小教會月三回の會日倉吉中教會の大祭日と大元へ年一回宛一生御禮のため參拜することとし廿六年五月より實行しつゝあり續いて余は御蔭を戴きたること數度茲に

大略を列記せんに余が邸素と由良川に沿ふて石垣の上に土藏を建し居りけるに彼の廿六年十月未曾有の大洪水の時水勢甚く強くして石垣の底より堀れ込み次第次第に屋敷は河心と變り土藏の下と見る見る半ば崩れて今や川の中へ倒れんとするの一奈落余は天照大御神様へ一心を立てたるところ不思議なるかな水筋變り水勢次第に緩くなりて屋敷が夫よりは少しも崩れず遂に轉倒の難を免れたり此余屋敷一二尺崩れなば致し方なき所なりし而して床上三尺餘りも浸水して甚た危きを以て一時他へ難を避けて水治まりて歸り見れば何分家の中流れ川の有様なりしにより血鉢の如き重き者迄も流れ失せけるに御神床に捲きたる儘に納め居りし儘

長閣下の御眞筆と板の本は依然として其儘にあり人々奇異の思ひをなしたり亦卅年五月中當由良宿四十餘戸は火災の爲め鳥有に歸したる時の如き南風の烈しき時南側僅かに貳間を隔つる家より火出てたり然るに十年餘り前より轉宅を思ひ立ち居りたりしが漸やく其年三月偶然轉する事に定め數町を隔つる所へ家普請をなし質藏の質物は素より家内の衣類器具の類迄残らず新宅へ運び土藏を毀して新屋敷へ建替漸やく屋根を葺きたる頃即ち質物其他を運びてより二十日目に舊宅は鳥有に歸したり誠に其運を御護り貰ひたる事近郷の話し種となりたり余は難病の治するのみならず種々の廣大なる御蔭を戴き加之入門以來家内中健康極りなく醫士と

勘當し灸の香ひを忘るゝに至るうべなるかな病の治るは道の入口這入て見れば次第次第に難有くなる開闢以來の御道へ早く世人を悉して味わすせたし

◎遠征の人黒死病を免る

明治廿九年十二月三十一日岡山縣備中國早島小教會所例年の通冬至祭祈念執行に付其準備中全所在勸中講義佐藤辰三郎へ臺灣總督府高等法院早川清人より佐藤茂七黒死病に罹りたりとの通信有之に付少講義渡邊萬吉發起となり一同神前に進み神言を唱へ當病平癒を祈り夕刻神饌を傳供せんとする其機一髮間臺灣より郵送せる鑑詰(十二月八日茂七か神一此豆納し呉れと申して

か無事に着いたら直ぐ知らせ」と狂句と共に送り來りしもの不思議にも冬至祭當日に着せり青豌豆なれば渡邊は神前に進み感謝一同に向ひ大音にて皆様茂七は御神徳を戴き青豆か着ましたと申し夫より皆々進饌説教を勧めり扱茂七廣大なる御神徳を被り御禮狀左に謹啓私義ベスト病に罹り候處幸に國元教會所冬至祭祈念にて特に御祈念被成下難有奉存候却説此ベスト病は首根腋の下臍の曲等に凝固が出來身跡忽ち紫色に變じ凝結は黒くなりて死す故に黒死病と云ふ私寢室にて死したる鼠一疋捕獲て其跡に石炭酸を撒布したれともベストのバチリスが傳染して十二月十九日午後八時頃股に凝固が出來去翌日は日曜なれ

はハチラン(名)地へ遊獵に行かんと長官の内意に依り鐵砲其他の準備忙しく爲めに疲勞して凝固が出来たかと思居候處非常熱發翌廿一日大熱となり高野勅任官始め上官の厚配にて朝晝兩度醫を迎へ被下たるに正午ベソトと断定し私殘念に付外出日拜し父上より送り被下たる大元の御洗米四色一度に噛みしめ其儘室内に休み居候不圖人聲耳に入り眼を開けは巡查三名人足四五人來會せり避病院へ行くかど切齒すれども致方なく最早信心の外なしと豫て教祖の神様生死は天命なれば天に任せよと御諭され候事も有之故に生死は天命と覺悟し潔く寢臺に上り候處大熱あるに此の病人は虛心平氣なりとて法院長書記官出張の巡查もあされて居られました

斯時私は寢臺の上に立ちて法院長以下に。別を告げ潔く臺北東門外の避病院へ入りしは午后四時十分なり病院長以下の醫士診察し股を指し此凝固がベストじやから切り取れば苦みもなくなり且早く治ると言はれし故生死は天命と覺悟し如何様になりとも宜しく被成下と申したるに直に股の凝固を切り取られ翌朝本教の御會日なれば天拜致居たる處醫師來診して熱は颯晴なしと皆々不思議と被仰夫より日増氣分勇敷相成候故是全く御神徳の御蔭なりと奉存毎朝晝晚日拜して神言を唱へ奉り候然るに明治卅年一月一日早天より切口頃に癒る醫師も此切口に雞卵か入るゝ程なるに餘り不思議に癒るたりと驚かれ候乍併私は御神徳と奉存候處豈圖らん

や今日父上の手紙應武様の端書渡邊氏の添書日笠先生其他信徒總代皆々御祈念被下御神札封書も着き法院早川氏より御通知の有之候とは存じの外是全く神事と信し奉感謝候就ては右信書落手するや直に日拜して教祖の大神にも御禮申上候此手紙着次第國元教會所にて御禮拜み被成下度私も最早全快致候に付御安神被下度奉願候恐惶謹言

臺灣高等法院にて

明治卅年一月十二日

佐藤茂七再拜

父上様

二伸私と同日に避病院へ入れる總督府の某參事官の如きは二日目に死去

相成候然るに私が送り申したる青ねん豆が國元教會所冬至祭の晩祭典前に安着し神納せし事を思ひ合はすれば實に難有て難有て神德靈驗の廣大なること御禮言語に難盡尙法院より賞與金拾圓下賜相成候以上

◎數度の難病平治す

鳥取縣氣高郡小鷲河村大字鷲降村

田中鐵藏妻 山名こよ

右山名こよは前掲田中とよの實母なるが腹部に小血塊を生し心苦く夜々安眠を得ざりしが遂に三十年舊正月十五日より腹痛を始め日夜苦痛一方ならず家内の者共打驚き宜く醫師の診察を受くべしと再三勸むれども病者は豫て神を信するの念慮深く殊に今愛女とよの靈驗に感佩致居ると

て一心神に任ずるに如すとて親族隣里の信者を招請し祈念及禁厭を受けしが難有哉苦痛始て治まり此迄四五日間絶食し水だけのみ居りしが粥少し宛進み様になり一同喜び居たりしに苦痛は少し緩みしにも拘らず血塊は益々大きくなり腹部漸々腫れ上り果は少しの皺みだもなく只さらりと光る斗に見ゆるが随て食物も進まず亦々腹痛益加はり家内の狼狽大方ならざるに病者は「六かしき病も已が心から直せば直る道は此道」の御歌を方とし如何なる大病も心一ツと思ふ故に我を離れて神に任せ苦痛を忍びつゞ日を送りしに時なる哉遇々船木大教正殿伊勢參宮の歸途高草小教會所へ滞在の由人を馳せて招請を願ひしに直に承諾あり舊四月十九

日來宅を忝ふし晝夜御祈念禁厭を施されしに靈驗著しく今迄石を包みし如き血塊略ば消滅し忽ち苦痛を忘れ數月の久しき間一夜だも安眠を得ざりし病者安々眠に着く事を得るに至り家内一同感涙を流して神恩の難有を拜謝し奉りぬかくて教正殿には四晝夜滞在ありて同廿三日を以て歸郷されたり病者は其後引繼御蔭を受逐々快方に赴き舊五月田植の手傳など爲し居たりしに又しも全月末の方より腹痛元の如く血塊も漸々大きくなるより家内の者共相議り教會所へ參籠せしむるに如すと云ひあへる内又々船木大教正殿八頭郡布教の歸途高草教會所へ滞在せらるゝを聞及び天の御擬作と早速駕籠にて參詣せしは舊六月十五日なり其途中最早

集 驗 靈

會所に五十丁の距離と云荒田村に抵りしに豈圖らんや教正殿の御車を賜
 つて歸倉せらるゝに邂逅し先神縁の淺からざるを悦び事の由來を申上
 りに教正殿には下車されて路傍の一農家を借り禁厭を施され且申さるゝ様
 此は決して忽せにすべからずとて其より打連れて高草小教會所へ車を運
 べせられけり病者の難有と雖も言んがなしかく同教會所は二泊滞在
 あり一心祈念禁厭を頂きしは御蔭著しく腹腫大に減じ血塊も忽ち少く
 なりしより教正殿には余は一先歸郷すべし此上は當所の所長殿に委託す
 べし宜しく全快する迄參籠せよとて同十七日御歸倉せられられたり其後
 二週間の參籠を了へ舊七日は難有くも元氣多郡鹿野村なることの里方

集 驗 靈

山名源次郎方迄駕籠にて歸しか其途 中駕籠に酔ひ嘔吐甚しく苦惱を極
 め辛じて山名方迄歸り兎角はて親籠より出しゆ座上に抱き上げしに病者
 は目も明け得ず足を立つ能はず其苦さ様言はむ方なく食物は少しも進ま
 ず只神水を少宛 戴くのみなり夫より益々苦痛加はり逐日病氣危篤とな
 り腹部非常に膨脹し周圍四尺余に及び殆ど裂けんとするが如く全身に水
 氣廻り手足腫の如く腫れ塞り同日には嘔吐數度五日には下痢數度身神
 苦惱し誠に見るに忍ざる有狀なり此上は船木教正を招待するの外術な
 るへしとて直ちに午前二時を以て急使を馳せ(伯州倉吉迄七里)教正殿を
 聘せしに早速承諾ありて時恰も炎熱甚か如きも厭なく翌六日午前九時

山名方へ來車され日夜片時も休息なく祈念禁厭を施されしに神威の加はる處かの膨脹せる腹部三日目には殆んど二分の一となり四日目には石の如き血塊解手足の腫も次第に減じ病者の苦惱七八分を去りしと雖も素より非常の難症なるが故未だ以て安堵すべからず日夜教正殿を始め隨行員中村壽彌及家族親族の者共一心撓じ事なく御祈念怠なし殊に教正殿には釜中に座するが如きの烈暑を物ともし玉はず抽丹誠日夜御祈念御禁厭を授けらるゝと三週間信に靈妙の神徳を以てか程の難病大に平快し腹部の腫痛も殆んど平常に歸し血塊も殊に少くなれり教正殿には此上は當家の親子等の一心にて自ら治すべし余は一先歸倉すべしとて歸車あらせられ

しは舊七月廿七日なり其後親族及家族の者共怠る事なく御祈念禁厭を施しに漸々快方に赴きければ病者も一先自宅へ歸らんものと舊八月十一日駕籠にて歸る積りにて出立せしに少くは歩行するも却て宜るべしとて出けるが籠に乗らんと欲する時もなく遂に一里余の道を歩行して自家へ歸着し駕籠は道中の荷物となりて止みにき御神徳の難有さ感涙を垂れざる者なし其後別に疲勞せしにもあられと別して快方に進む状あらざるより此度は中村壽彌先生を招待し日夜精々御祈念禁厭を頂しに舊八月廿七日を以て腹水下り始めしが翌廿八日に至るも更に絶る間なし於是中村氏を始め一同打揃て一心御祈念せしに午前十一時比より腹痛を始めし

に漸々苦痛甚しくなり立ても居ても得不堪誠は飛立ん斗りに惱み苦み狂
 び悶へ實に九死一生と云はん斗の有状なりしに信者のものも此處を起死
 回生の大關門ぞと代る々々腹を押さへ背を抱きて心を亂す勿れ心丈夫な
 れば病氣は治る者ぞと鎮魂の大事を示し誠の五事を繰返し難有御神詠を
 吟じ病者の心を活し一心に祈りしに難有くも午後一時の比血塊盡く下
 出し従て腹痛も止み茲に積年の痼疾全く消滅し痛者も初めて蘇生の想を
 なし家族親族の難有さ感し云はん方なく感涙は咽び合へりかくて病者
 は其より漸々全快し身体強健平常に増々日夜御神徳の難有さを拜謝し奉
 りつゝ家務勵精し猶御道手厚く勤めるに勝見小教會所より出願に

十二月廿二日級外尊等信徒を授けられ同月廿七日祈願を免許せられ益
 御神徳の難有さを感し居り
 ◎無邪氣の小兒主匪の難を免かる事
 長崎市本古川町五拾三番戸大石庄太郎妻
 長男 喜代治
 右月主庄太郎は商業の爲め前年來臺灣に渡り臺中縣(元嘉義縣)雲林斗六
 街と云ふ地にて貸座敷營業を爲し松月樓と号し追々繁昌しける留主中興
 され明治三十年の春大病に罹りたる末初めて本教の禁厭を受け速かに全
 愈なし以來信仰怠り無く毎會日長崎中教會所へ參拜し教説を聴聞し專ら

敬神尊皇の志ざしを起し斯道を研究しける折柄夫庄太郎よりの報知に因り家族一同卅一年十一月臺灣に移住しけるに明年六月に至り都合に因り貸座敷營業を其儘他人に譲り渡し同地を引拂ひ正金壹万圓を携へ家内一同歸國に決し右壹万圓を拾圓紙幣に引換千圓宛を桐油紙にて包み分け都合十包と爲し之れを肌の前後に結び付ける胴巻の用意を爲しつゝ妻さだ思へらく兼て夫に信心を勸むれども無頓着にて偶肌守を與へるも湯屋に打忘れ置かるゝ故今回は大金を所持して遠隔の陸海路を旅行する事ゆゑ大切と思ひ懷中御神号一体と夫の實印を一包の紙幣の中に包み込み如此爲し置かば打忘らるゝ氣遣ひ無しと取計ひ置き夫庄太郎悉皆之れを肌

巻き付け一同駕籠にて本年六月廿八日該地を出立しさだ母子の乗りたる駕籠を眞先さにして里程一里許の山中を越ゆる時朝日さし昇りさだの乗りたる駕籠の中に日影さし入りければ小兒喜作治を抱きながら御陽氣を吸ひ込み心中に毎朝御日拜を怠りたる日も無さに今朝は發途の用意に取紛れ甚だ御無禮を仕りましたと思ひ乍ら神言を唱へかゝる折しも耳を貫ぬく如き銃炮の音に驚き駕籠鼻は駕籠投げ捨てゝ逃げ走りければ倒るゝ駕籠と諸共に母子共道路に轉ひ出たるに凡三拾人程の土匪取圍みて銃殺する勢ひなれば急ぎ衣裳を脱ぎ捨て懷中せる小遣ひ金四五圓程と包みの儘投げ遣し命を助け呉れと詞にも手直似にも致したるに更に聞入れず

靈 驗 集

母子共奪ひ去じと取掛るを行かじ遣らしと女乍らも一生懸命争ひたる折しもオカミサンと二聲日本人の呼聲聞ゆるに土匪等は驚きけむさだの肌につけたる守袋と小兒を奪ひ取りさだをば押倒し置き何地とも無く逃げ失せけるにさだは倒れし儘氣絶なし暫らくは前後も知らざりしがフト人心付き見れば誰一人も居る者無く親夫トの安危如何と心を鎮め方角を考へ行くに凡半丁程の所に我が乗りし駕籠も其儘投げ捨ててあり直ぐに其後トに老母引續き夫ト共既に銃殺されて何れも駕籠の中に横たはり居るに悲憤遣る方無く種々介抱するも最早事切れたる後にて如何にも詮方無く殊に夫トの腹の上に血まみれの胴巻あり取上げ見るに何か

靈 驗 集

一品残りたるに心付き血を絞り取出すに全く千圓の包なり不審ながらも改め見るに尊くも懐中御神号を納め置きし一包の千圓丈け残り有しにぞ御神威の畏こさ愈肝に銘じ此上は其筋に訴へ親夫トの仇を報ひ小兒の行方を搜索せむと心を勵まし氣を取直しあたりを見れば幸ひ手荷物の中なる右帷子一枚残しありしを身に纏ひ斗六街さして一二丁立歸る折柄憲兵并巡查の巡廻に行逢ひ早速保護を受け親夫トの遺骸を夫々取片付けたるも小兒の安否知るによしなく熟考へ見るに既に我一命も危かりし時人も無きに日本人の呼聲二聲迄も聞ゆ之れが爲めに強賊恐れて逃げ去り殊に我肌につけたる御守を小兒と共に奪はれしは全く

大御神教祖大神の小兒を御加護成し下さるゝに相違なしと一心不亂
大御神に御絶り申上早速に長崎中教會所へも其趣を通知して祈念を乞ひ
置き尙懇意なる士官兵士の方々へも依頼致し種々手を盡す中右災難に逢
ひたる場所に五千圓の金を出すなら小兒を返すとの張札を土匪等の爲し
たりとの評判高く如何にも残念乍ら詮方も無く暮す中近傍なる營所に使
用さるゝ土民の一人或る日の晩親族の供養に参り度とて一夜の暇を乞ひ
けるに何地なるやと問はれければ從是三四里を隔てたる山奥なりと答る
にぞ土匪の住所なれば土匪の供養ならんと彼れに知らせず後トより五拾
名許の兵士忍び行かれしに果して廣野に多數の燈火を掲げ土匪等群集し

居れり忽ちに炮發して追ひ散らされし跡に六歳許の女子九歳許の男子二
人の子供残りて泣居るを生捕りて歸られしかば其後彼の親等悲歎の餘り
吾營所へ歎願しけるにぞ當方にも先般松月樓の小兒を奪はれ居れり之れ
を搜索して連れ來らば交換すべしと竟ひに彼れが方にて探索して八月三
日双方無事に交換せられ翌四日に至り別れし日より三拾八日目に母子對
面す無邪氣の小兒土匪の言語を遣ひて母親に抱き付く當時の情況委しく
陳述せしも筆紙に盡す能はず九月十日母子共歸國して長崎中教會所へ參
拜して前記の次第 神德皇恩の廣大難有さの生涯忘れがたきを述べ感涙
にむせびつゝ本人の物語るを其儘に筆記致し候也

明治三十一年九月

因に記す右大石さぶらは自宅に神牀を新に設け長崎中教會所へ依頼して
教師を招請し九月十二日祭典を執行尙小兒喜代治成長の後も

神徳 皇恩を忘れざる爲め將來毎月一回祭祭を執行致し度旨中教會所
へ依頼したり

編者曰教祖神の御書翰中に「信心は御心に年のより成成ぬや萬事日
月に打まかせ何時までも小供の心を御はなれ成されず日月様を乍恐
親様と思ひ」云々とあり小供の如き彼我の隔なき正直に無邪氣なる心
を何時までも忘れず日月を兩親の如くに思ひ定めて日月に絶り奉り御

靈 驗 集

分心を傷め汚さぬよふにするを信心と云ふ常に信心の場に居れば病氣
災難を免かるゝのみならず不生不滅の樂しみを得限りなき天地と共に
生き榮へらるゝと云ふ尊き御教なれば御外さるゝよふ修業致した事
なり

◎譬諭の一言忽ち活氣を與ふ

岡山縣赤磐郡高陽村大字長尾石原敬三妻行野は胃病にて年來困難せしか
明治三十年四月中旬より病氣重り服痛酷敷隣家なる四級信徒石原類三郎
氏を聘し（氏は年久敷本教を手厚く尊神せられ禁厭を施さるゝや靈驗最
著明なり）御禁厭を受くる毎に服痛は即座に罷むと時々指起り漸次病勢

靈 驗 集

相繋り魚の腸の如きものに血液を交へたるものを吐吐し服痛烈しく醫師は胃潰瘍とて全快覺束なしと云ひ素より數日の絶食唯御神水と藥汁を給するのみ益衰弱に陥り五月十三日午前八時頃遂に絶息したりき石原氏は直に御祈念御禁厭を授けられ家内の者共も狼狽騒かず心を鎮めて信仰せしに四十分間斗りにして不思議にも呼吸吹き返したり依て直に御神水を頂かしめたるに本心に復し一同御神徳の尊さに懺拜したりき然るに石原述造大森孝太郎の兩醫の診断は醫術にては到底治すべき樂しみなしと斷言せられたるに依り此上は御神徳一途にて御庇蔭蒙らるゝものと確く決心し家内中御祈念の外餘念なかりし（他よりは是處彼處流行神灸よ針

は）不撓不屈一筋に日の神様へ御頼かり申たり石原教徒は朝夕無怠御禁厭を施されたるに難病なりけん衰弱彌増し危篤に迫り全月廿七日午前九時頃に到り惣身冷却し又候呼吸絶たりき親戚近隣の者共寄り集ひ枕邊にて泣出すもあり跡に残りし乳呑兒の事ども言ひ歎くもあり實父は和氣那の親屬に御眞筆御神号を秘藏せり今少し早く思ひ出だせば死なせばせむに残り多しと愁傷したり是に於主人は心を取直し今更斯く歎くべき處にわらず其御神号をも借用し來れ御祈念をもせよと一同を活し勵げまし石原信徒は一心不亂御祈念御呪に餘念なかりき（前に河本小教會所へ馳付たるものあり）斯る處へ河本教會所長大講義太田永正權訓導藤野宗義

兩氏來られ供に丹誠を凝らし御祈念御禁錮を授けられける又御眞筆の御
 神号も御入になりたり（御神号は和氣郡本莊村森吉三郎の秘藏せるもの
 な）直に該御神号と齋ぎ祭り御祈念せられけるに不思議や忽ち息さ
 返し蘇生したり直に御神水を進めたるに速に戴き又幽かなる音聲にて難
 有し難有しと申したるに依り一同歎ひ且驚き御神徳の難有さを尊み合ひ
 たり夫より交々説教ありしに各難有き御講話相浮み眞の御神宣なりと難
 有く拜聴したり太田大講義の説教中に甚五郎の刻みし龍は水を呑みに出
 て加納古法眼の畫きたる鶏は時を謠ふと然るに日の神と御一体なる歎祖
 神の誠を込めて御認め被遊たる御神号は恐れ多くも

天照太御御光臨ましませしに相違なしと申さるゝや心根に徹し難有さ譬
 る方なし夫より御禁厭を戴きたるは二十日餘りも絶食せしもの御供への
 御飯を頂き病苦も大に輕快に越きたり是の夜は野邊に葬らん乎と思ひた
 るもの如斯御靈驗を蒙り皆々憾涙に咽ひけり爾來怠らず信仰しけるが病
 氣は輕快に向ひ食氣付或は自から起臥する等朝より晩晩より朝と順次に
 快方に越き隨て身体も大丈夫となり遂に全快に到り家事を務め以前よ
 り健康の身とはなりたり則全年十月十六日に於て盛大なる御禮拜式を舉
 行せり

病床に居る事百五十日餘絶食する事二十五日餘絶息して蘇生せし事二

回如斯大患にて萬死に一生を得たるは御神徳の尊き事は申も愚なるか石
 原氏の不怠御禁厭を施されたる誠と御眞筆の御神号御入になりたる家
 内中一心に信仰し猶看病の克く行届きたると本人の精心常に活きたると
 皆な天の御擬がいならんか是の御蔭を頂きし以後は國の教を毎号申受け
 家内の者共へ漸し聞かし且近隣の人々へも讀み聞かせ尙左の歌を詠たり
 天照す神の御徳を世の人に残らす早く知られたきとの教祖の御神慮の萬
 一に副奉らんとす

乳呑み兒を殘して死てにいつる身を
 いかしてちを恵むおや神

根に花のあるとも見ぬ各木立

神の恵みの春とたふとき

編者曰人の身に疾病程難義なるものはなし又疾病の癒へし程嬉しき事
 はわらじ國家の爲めに精忠を致し父母の爲めに孝養を盡し又家業に勉
 勵せんと充分志はありと雖ども身に病氣ありては志を達する事能はず
 故に疾病程難義なるはなし疾病の癒へし程嬉しきはわらじ斯道は病氣
 の癒るを以て素より足れりとするにはわらざれども病氣の癒へし時の
 嬉しき有りがたき心を常に取外さず修業すれば遂に樂天安命神人一昧
 と云ふ道の蘊奥に遡らるるものなれば病の治るが道の入口と云ふ教祖

神の御詞と玩味ありたき事なり

靈 驗 集

◎權中教正渡邊博氏の靈驗

抑も京都神樂岡は惶くも 失帝の勅願所にして殊に尊き靈山なり（當管
曰く大元は教祖の和魂にして神樂岡は荒魂の鎮り玉ふ所）赤木忠春神御
ならむかと宣へるありと味ふ可し、賞罰新なる神社なり）
勸務の項より御神井と稱へたる靈井あり若し神意に不叶る事ある時は水
色忽ち變化すと成り既に三十五年二月此靈井俄に水濁きて出てす教職教
師等打驚愕て御神慮を慰め奉り屢々一向に誠心を振起して御託を致すと
雖も更に其功驗なければ臨時協議の上神樂岡中教會所に所長を置きて御
神靈を御勇め申上なばやとの決議をなし在勤教師一名副所長二名と共に

靈 驗 集

四月十日京都を發して岡山に到り翌二日本廳に出頭し管長殿に拜謁の上
前條の次第を上申致し然る可き所長を願ひしかば渡邊に申付るとの御言
葉なり右に付三名の教師は大に喜ひ早逸御請申上て旅館へ引取り十二日
の早且に猶參廳して御暇を告げし時管長殿曰く「最早所長も出來た故安
心で有ふけすれば歸りて看よ井戸には清水が充分戴かれて居るぞ」と三
人の者喜悅限りなし去りなから片便の事故半信半疑にて歸京せしは早や
黄昏時なれば翌曉（十三日）副所長一名神樂岡に參拜せり彼在勤教師は御
宮より降り語りて曰く「今曉井戸を窺ひしに誠に結構なる清水が充分に
戴かれて有る」と云へるに副所長之を聞き昨日管長殿の御言は全く符節

靈 驗 集

を合するが如く所謂天言なりと感服し有難た涙に思はず兩人共袖を紋りつゝ天を仰ぎ地に俯して御禮を申上たり同月十六日に神樂岡中教會兼務の趣渡邊教正の許へ達せられたり然れ共凡八ヶ月程以前より病症の爲め衰弱甚しく面色青白くして音聲も出でず就ては説教も動まらざる故に御請も等閑に打過さ五月二日參應して管長殿に拜謁の上右の次第を述べ更に御辭退申上たるに管長殿曰く「夫れは教正のいふ詞ではない試補なれば兎も角も」と宣へるに尊き嚴命の話語に感服致れ早速御請申されたれ共何分病氣のため動まらぬ故實に當感せられたり併し乍ら管長殿の嚴命は教祖の神宣なりと難有く奉戴し神樂岡鎮坐の兩宮（天照皇大神、教祖宗忠神）へ

靈 驗 集

所長兼務の旨奉告の爲に參拜して神言奉讀中に浮びたる次第「數多教職も有る中に斯る尊き御山へ御引寄せに成るといふものは全く御慮の然しひる所なりとおもひ猶ほ赤木ノ神（赤木忠春ノ神は此山に年久しく御勤宮の傍に）の御事を思ひ出し唯何となく有かた涙こぼれて無我無念の中に神明御扉の中より出御遊はざるゝ様なる心持するところらの心も向へ進むやうに思はれ又向ふからも彌に御進みなさると思ふに付ては猶此方の心も益々進み寄り互に進みに進んで神靈と分靈どが御一体に成りし様らなる心地すると全時に胸の邊より清水を注て汚穢なる躰を洗ひ滌くが如く眞に無量の冷氣を感覺したりしが一切形の上の事を忘れ勤まる勤ま

らぬと云ふ場合は扱置さ今迄胞中に竊々としたる雲霧は所謂科戸の風の吹拂が如く爰ぞ眞實に高天が原なりと覺ゆしかば今迄微音なりし神言も思はず知りず大聲發し一時に壯健の身体と相成りしとぞ赤木翁の詠したる如く「神進く已も進くちかよりて神とへだてのなきぞ尊とさ」實に今般の靈驗斯如ありしと渡邊氏云はれさ實に近世無比なる靈驗の顯彰れたるは是全く中教正渡邊博氏の御神慮に相協とし微ならざるはなし然りと雖も其御神慮に協ふ可き所長を看徹されたる管長殿の明眼實に恐惶すべきなり

猪渡邊氏は同月廿日歸姫の際神戸教會所(元中教會)參拜せられし所同夜

は即日待祭なれども所長杉嶋教正は參應にて不在に付幸ひ齋主を依頼致したし併し兼て御病氣故説教の義は如何ともに杉嶋妻女の申されけるに渡邊氏の曰く私は昨日京都神樂岡に於て實に靈妙なる廣大の御神徳を頂戴致したから其有難き御庇蔭の御咄を講座より御披露申すと即ち祭典執行の後説教勤務の半に彼の杉嶋氏歸所せられて渡邊氏の大聲なるに驚愕き猶有がたき靈徳の次第に感服せられしなり同月廿二日明石教會所にて御日待祭を勤めて翌廿三日に歸姫せられたり其後六月二日渡邊教正は參應然るに翌三日岡山大教會出張所に於て管長殿の御親教遊ばさるゝに付隨行命せられ神樂岡の靈驗の一條を講座より披露せられしに管長殿の御

欣喜斜ならずりしとなり

因に同渡邊教正は若年の項より斯の道を慕ひ猶ほ壯年の後は東西に奔走して布教専務に盡力せられたるが故に其御蔭を蒙る者數驅りなく是により庶人其徳義を慕ふ事幼兒の慈母に於けるか如し然はあれ斯道に遊ぶ事教正一代の事のみならず即ち祖父の代より三代に及べり既に教祖も入らせられて御神教あはされたる實に代々有がたき家系なり

◎道味を悟りて大患全癒す

阿波國阿波郡久勝村大字勝命村

川人喜五郎

靈 驗 集

不肖喜五郎十余ケ年の長病御神徳の御影にて一日に平癒一命を助り以來三十余年間御影を受し事筆紙に盡しかたけれども概略を述て御神恩を謝し奉る根元喜五郎は生質虚弱にて尋常ならぬ多病殊に心氣弱く人の怒るを聞は我身に罹らぬ事迄も氣を遣ひ心を痛め只何事も心配して胸塞かり心を痛めけり終に廿二歳安政五年の夏胸痛病に係り身体衰弱日々に増し醫療手を盡せども更に驗なく寐たり起たり時の流行風邪杯は必ず人より魁け病の間屋とも云るゝ程諸病に腦み既に存命覺束なき大患となりし事三四度あり病ゆるみし時迎も家業勤らす人に逢事さへも厭ふと云ふ風にて奥に隕れ杯して數年の星霜を経る内醫師も度々換り又灸も多く据へ神

佛に祈願怠らす四國靈場切幡寺に籠り或は深山に登り念佛修行百万編を
 操りても更に験なく自ら覺悟して兄弟も數人あれば死んでも一家に指支
 なしと常に死を待ち浮世をはかなく思ひ家事も勤す一日二日暮す内廿九
 歳の春より病甚重くなり胸痛堪かたく加るに心熱強く癆症の体になり惣
 身冷渡り血色悪く色青く疲て骨と皮となり夏冬の嫌なく只寒さ堪難く
 腹には眞綿入の腹當を、脊には眞綿入の胴着を着込其上へ綿入を重ね頭
 には寐た間も頭巾を放さず是全く常に冷て暖りなく皮肉和かになり月代
 出來ぬなり其時分は牛髪にて月代せされは人中へ出る事能す依て種々工
 夫して鉄にて摘込人中へ出たり又風呂に入られす時に汗出たるを見合せ

垢を拭ひ取夏の土用にも綿入を重ね着夜は蒲團を重ね着て漸淺き兼たり
 然に喜五郎は七人兄弟の内次男にて兄は前年別家して喜五郎に家督相續
 させる父の見込なれども斯病身故辭して弟に相續させん事を願ひ獨身に
 て暮す内三十一歳慶應三年の四月一人残りし弟も他家へ養子に行ければ
 獨考る二兄弟數人有て家を續者なきは不孝なり弟等家に居る内は我死す
 とも更に指支なければとも今は我身こそ大切なり何卒病氣を直し存命させ
 れは血統絶ゆべし此上は病氣平癒の手當せん其手當は如何せん今迄醫療
 も盡き藥も灸も功なく神佛に祈れども験なししかし此上にも一心を籠め
 て神を祈らは平癒せぬ事も有まし何れの神に願ん我叔父大塚伊平と云ぬ

り十里余隔ければ折に來て云近年黒住の御道流行御影を受病氣平癒せし
 人限りなし我も大病平癒の御影を受たり御道に入れよと勧め呉し事有れ
 ども根元流行の神杯に迷ふ事嫌ひにて叔父の勧め呉るも空に聞て居たり
 しか不圖此度の考より叔父に逢て理由を聞若し正路の教なれば入つして
 見はやと其由頼み遣しければ叔父大に喜び十里余の道を厭す來て呉れた
 り
 喜五郎黒住教の理由を聞度願ければ叔父直に來りしは慶應三年四月廿八
 日にて此日弟他家へ行さし翌日なり叔父に云小生今迄病氣平癒を望ま
 ず命を惜まず日に死を待居たりしは今兄弟皆他家へ行吾一人家に殘る上

は是迄の如く遊て居ては家立す依て信心を致度兼て毎に御勧め下さる黒
 住とやら云道は如何なる信心の仕方なるや目さす神は何様なるや正道な
 れは入門致度由語れば叔父威儀を糾し其許の病氣平癒の時來れり抑黒住
 の御道と云は備前の國にて黒住宗忠様と云御方の開き給ひし天地の大道
 なり門弟諸國に充満し則宗忠神と尊崇せり御道は益廣く盛んになり又眼
 さす神とは
 天照大御神也宗忠神は佛法にて云は祖師弘法大師日蓮上人と云ふがこと
 ひ人を誠の道に導き給ふ又説かるる所は神人一体と云て神國に生れし身
 になれば皆神の子孫にて形について起る所の我私を去れば直に我をも神

靈 驗 集

也心を以て心を活し人皆是に反して我より心をいたため腹を立物を苦にし
 て天照す日の御神より受けて備へたる御分心を傷め終に身を殺し死に至
 るこそ歎かわしき事ならずや信心を云ても天窓から水を浴たり斷食する
 様な苦心はない只安らかに身魂をいたため様心を以て心を養ひなは病は
 道の入口に直さうと思はる直るに違ひないと一通りの嘶喜五郎忽ち夢の
 覺たる如く闇夜に燈火の光を見し如く嬉涙を溢し手を打て大に喜ひ我心
 か神なり心と以心を養ふ譯なれば我好む所嗚呼蘇生したり是より一心不
 亂信心致たし御道に入とは如何なる手順なるやと問ふ叔父云入門するに
 は神文を捧げ生涯變心なく人たる道の誠を勤る誓を立る也喜五郎謹て神

靈 驗 集

文を認め生涯は愚子々孫々に至迄神道を守らせ申可と氷より禁厭を受し
 に旭に霜の消るか如く黒雲を洩出る月の如く十余ヶ年の胸痛忽ち心深く
 腹中洗ふか如く氣も晴れ快く只面白く難有く嬉しく心勇みて病は何所へや
 ら日に氣力強くなり晝夜神言を修行し諸方へ出て説教を拜聴し有がたき
 身となりぬ
 我心尊き神て有ふとい今の今迄思はさりけり
 此日迄既に無き身と思ひしに今は壽を悟る嬉し
 立て見つ坐りても見つ我體自由自在に成と嬉し
 枯木かと思ひしに此若葉か那

喜五郎廿二歳より三十一歳迄の長病一度御道の理由拜聴直ちに發明胸中
洗ふか如く涼くなり斯く尊き神教を拜聴するは全く病故なり存命故なり
病か有かたいやら命か有かたいやら心勇みて諸方へ出高弟教師と尋道を
研究し講社を企禁厭御影嘶坏して近日身体強く成に付翌明治元年八月備
前大元へ拜参の爲出立しけるに病は癒へたれども心熱解す身体弱く眞綿
入の胴巻を着込一人發足三里歩行五里歩行終に見島郡興除新田なる教師
應武鶴三郎先生方迄着通夜しけるに風呂に入れよと勤められ答けるは私
は心熱未だ解けず最早三ヶ年余風呂に入事出来申さすと云ければ先生は
大に笑ひ御道修行に來る者は風呂を懼るとは臆病千万なり何の爲海山を

越へ來りしを早々臆病の垢を洗ひ清めよと吃られて心配一方ならず若も
心熱發しなは誰か介抱して呉ん病氣起りは國へ歸れず路銀は少しと云て
風呂を懼れては修行にならず、儘よ身は神に任せて臆病の垢を落さん
と心の内おそれつゝ御陽氣を重く吞込々々風呂に入や否手早く洗ひ急に
出て拜禮し其夜は薄き蒲團にて寢しに豈斗んや終夜汗出火の中に居るか
如く惣身暖まり快く熱睡しける其時の嬉さ生涯忘れたし夫より種々先生
の教諭を受發足彌大元へ參拜御神前に禮拜思はず涙を流思さや既に死を
決せし身にしてかゝる尊き御神教を受病中一人海山を越へ教祖降誕の地
を踏み御神前に禮拜せんとは實に蘇生の心地夢現の如く嬉ひあら有かた

いやら其時の心中云に云れぬ心進み良漸前後を忘れ拜み居て一先宿へ歸らんと後ろに置き荷物取揃へしに荷物は有れども脇指見へす是全永々拜し居る内に盗れしなり此事御投掛へ申上しに其時田中先生も居合し(田中先生は前年より御道弘めん爲阿波へ度々來り知人也)夫は氣の毒なりと御奥へ有姿申上呉れしかは御仁憐不淺定て歸國道中淋からんと畏多くも御指替の一腰拜借叶ひ身に取て大慶押し戴拜借して其夜宿屋にて思ふに命も助り大病も御影を受し御神前にて帶刀を人に取れしは神罪なるや何故なるやと寐ても寐られず熟考せしに帶刀して世間へ出るは全く我は武士なり無禮われは切捨ると云ん斗刀は人を切道具なり是を所持する

は太平の御代に穩當ならぬ爲所なり丸腰にて人に輕蔑せられふが我心神人一体にて誠と守一点の曇なき時は何をか耻ん何をか恐れん我刀取られしは全く我は士也我は歴々也と云慢心を去る様に人を切る道具は入ぬ物と云神の御示しなりと發明して一首
有かたや誠の道に入り見れば及用ぬ御代と社知れ
斯詠して翌朝一紙に認て本局へ出し此日の御厚志を深く謝し奉り以前考し事を語りて拜借は有難けれとも神慮の恐れありと御斷申上返上しける果して其時より五ヶ年目一般帶刀癢せられ思ひ當りぬ斯て滞在中度々風呂にも入三ヶ年目に月代もして身体健かになり肌に着込し胴着も重く勇

み進んで歸國す

喜五郎病氣平癒御禮 旁 修行の爲大元へ拜参三ヶ年余心熱にて風呂に入
れず月代出来す夏冬なしに布子重ね着なりしに備前にて月代もじ風呂に
入り勇進んで歸國せし嬉さ晝夜御道を修行かふる尊き御道の開けし時生
れ合せし者の幸ひ病に罹りし人の高運若し教祖御道を開き玉すはいつれ
も闇夜の如く若し病氣全快せば追々邪宗に迷入るか若し全快せざれば既
に黄泉の客となる身を却て誠の道に入腹も立す物を苦にせず貧窮も厭す
人を悪ます何事も天に任せ生通しの道を樂み暮す嬉さ遂日丈夫になり翌

明治二年三月廿八日五年目に單物を着歲三十五にて妻帯三十九にて父に

集 驗 靈

別れ四十にて村吏となり十余年在勤其間御影を受し事數限なく第一明治
十一年一人の母六十三にて大病に罹り醫療盡せども既に一命危く此時喜
五郎思ふに我は死すへき命も助り御影にて一家の世帯も豊かになり是よ
り母に孝養を盡し度樂みしに今母死去せは我存命して何の樂みあらん且
我には弟ありて仮令死すとも指支なし母は只一人にて若し死なば再逢事
叶すされは我身より母は大切なり我一命を天に捧げ母の存命を祈りんと
深夜に一首の歌と詠して

我身には代れる人も有なれと母に代りは有らざる物を

斯詠して願文に書添天を仰て終夜母の助命を祈りしかはあら難有や翌朝

より忽ち快方に赴き食事も進み大患全く平癒し常よりも尙息災に成親子共に御影を受難有事なり夫より十余年を経て母七十一歳明治十九年の春中風症に罹り甚大患にて醫師云老人の事取平癒せずと然に喜五郎は一心平癒を祈る内思ふは前年には我一命を捧て母の助命を願ひしか今又大病は全く我罪なり御影を取外したるなりしかし今では兄弟皆他家へ往て我身も大切也此上は欲な願なれども母も我も息災にていつ迄も孝養盡し度一向祈りしに又々御影を戴き中風の大患日ならず平癒常の如く達者になり此後十四年の永き再發せず無病息災にて家事を助け呉ぬ此時醫師は不思議に思ひ此大老に此大病平癒したは妙也とあされて人に嘯ける此外世

余年間に御影を受し事算るに暇わらず我六十二歳母は八十三歳にて眼も見ぬ耳も聞へ達者にて家事を助け呉孫も數多出來浮世を面白く慕し風流を好み雅名天樂園五絃と稱して俳借發句を樂み相當に暮しね
日の神の恵み老母草の若葉かな

◎刀瘡全癒の神庇を受く

備前國上道郡浮田村大字草ヶ部井上安平は母と弟と三人暮しなりしか三十年四月廿五日午前一時頃強賊押し入り大いなる男二人安平か枕邊に拔身を提げ突立しか母親は戸外に忍び出で大聲にて隣家の救を求めたり賊は此の聲を聞くや切掛り安平は心死防衛せしか遂に右足に切り付けられ

長さ五寸深二寸其他少傷數ヶ所に蒙りたり斯る處へ近隣の人々駈付くるに賊は直ちに逃走したり一面は西大寺警察署へ急報し一面は醫師を迎へしに動脈を切り居る事として生命の程も覺束なしと猶岡山地方裁判所の判事書記醫師を隨へ現場に出張せられ委細の様子尋問せられたるも僅かに一二言答へしのみにて生氣を失ひたり醫師も最早是迄ならんと云はれしが全日午前十一時比親族なる八木孝一氏御禁厭を授け夫れより岡山病院へ昇き付けたるか醫師は此の大なる刀創にては創處より先は切り落さざればなるまじとの見込なりしか非常に衰弱し居たりし故翌日を以て手術は取掛られしか家族の者等の信心の徳にや前日より少し見込みありしに

依り保存治療として刀創の癒着する様に治療され猶創處は平癒するも到底歩行する事は能はぬと断言せられしと病院にて三十三日間施術を受け退院し自宅に於て近村の醫師の治療を百日計り受け醫師は已に是迄にて治療の術も盡きたれば此上は保養第一なり然れど以來歩行する事は望みなきぞと言放なれば本人は生れも付かぬ不具者となりたりと悲歎せしか思ひ返して斯くなる上は神力に頼るの外なしと一心決定し全村津下俊造氏を聘し説教を拜聴する中に自然と陽氣になり御禁厭を頂き其夜は足傷の事は打ち忘れ天照太御神の御神徳の難有事のみを思ひ休み翌朝は起き出で何心なく少許歩みて顔を洗ひ清め神床に向ひ神言を奉唱し居

しを家族は是の体を認めて生涯足跛なりと思ひしものか歩行の叶ひしや
と御神徳難有しと大に歡びけるに本人は始めて心付御神恩の難有に感し
益々本教を尊信し其後續ひて御神徳を蒙り今日に於ては重荷を擔ぎ又は
山路險坂を攀づるも更に指支なしとなん鳴な尊きことにこそ

◎不治の眼病即座に治す

鳥取縣因幡國氣高郡鹿野町

山名一二妻 田中 とよ

明治十年二月十二日生

右とよは去る明治二十七年八月中右の眼に俗に謂ふ(マロート)なるもの
幾つとなく出て其痛みに苦み居たりしが程なく其(マロート)は治しけれ

ども爾來何となく心地悪しく始の比は左程に覺ぬざりしが漸々視力減衰
し遂には對顔も見分る事能はざるに至り始めて打驚き段々醫師に診せけ
るに何れも此れは瞳孔破裂せる故中々の難症なりと云ふ鼻源次郎は更め
て御神徳の尊きことを教へ扱云ふやう人の目は恐れながら天の日月なり
日月の破れたる例し更になし臆病と疑といふ陰氣の雲霧だに起らずは御
光明は今も照り渡り玉ふ也只一心に赦ふべしとて是より相共に赦の執行
を勤め御神徳にのみすがり居たりしに時なる哉明治廿八年十二月に至り
同郡高草小教會所新築落成し其遷座式に船木大教正殿出張さるるに際し
其通行道なる勝見小教會所に立寄りらるる由比處を御神徳を蒙るべき時と

大に喜ひ勇て實母山名こよ(源次郎養妹にして全郡総茶村田中鐵藏の妻)に伴はれ十二月十一日早朝(里程殆んど二里)該小教會所に參詣し御禁厭を頂さしに尊さ哉只一度の御禁厭にて忽ち教正殿の尊顔を薄々拜ずるを得るに至りぬ其難有さ忝さに涙を垂れけるに教正殿には御神殿に向て暫く御黙禱せられ後再び禁厭を施されしに益々御蔭を蒙り大に視力を増しけるが教正殿には何くれと難有御話を聞せられ明朝を待て定宿なる鈴木某方へ訪來らんことを約せらる翌朝は歸めて其旅館へ參り三度目の御禁厭を頂さしに教正殿の御白髻中二筋三筋の黒髪あるを選り視出る程に至り誠に難有くなり母子共に嬉涙に咽ひ御神徳の靈妙なるを感

謝し奉り程なく御出立せらるるを見送りて歸宅致しぬかくて十四日は彌高草小教會所の遷座式なるを以て母子共に親族近隣の人々を誘ひて早朝出立參詣致し(里程四里余)度々御祈念御禁厭を頂き彌々益々高大無邊なる御神徳を蒙りさしも不治の難眼も科戸の風の八重棚雲を吹拂ひし御空の如く全く平治せり嗚呼難有哉尊さ哉

◎教祖の御講辭を拜聽して眼疾平癒す

美作國糸南條郡(糸郡)中初村赤木忠春氏は天保八酉年の春廿二歳にして不圖眼疾に罹り朦朧として物の色も辨し難く成られければ同氏は勿論父母も深く歎き有らゆる名醫の治療は素より神佛へ祈願を籠め種々手を盡

されしも眼疾は年月を經るまゝに其痛を増し終には兩眼を失ひ給へり時
 に同氏の親族同國勝南郡(勝田郡)稻穂村中庄屋西村才助氏黒住門人にし
 て深く道を尊信しけるゆへ時に觸れては教祖の御高德なる事より道の旨
 趣等を懇々と晰しつゝ黒住教の御蔭を受けられよと進めけれども同氏は
 泰然として勤かず西村氏は白方説き進められし末に一日赤木氏に向ひ言
 辭を改めて貴殿は儒者にして聖賢の書に通し玉ふ然れば黒住の先生に面
 會しては如何にぞやと赤木氏が兼て尊信せられし儒學を以て勤めければ
 漸く承諾あり初めて黒住家へ參拜せられけるが折節御會日にて教祖は今
 しも御高坐に進み玉ひて例の御音吐にて御講釋坐しましけるか其御講辭

中に出羽の國に正直なる人あり形ち諸共逢萊國へ行き度と望みを抱き諸
 々方々を徘徊し居りしか同國內秋田(現今秋田市)の附近に至り或る米
 屋に物語りしに其米屋は千日我宅にて米搗きをすればお前の望み通り逢
 萊國へ行ける事を教へ遣すと云へるに正直の人とて其意の通り千日の間
 同家に於て米搗きをなしけるにいまだ同主人より教へ呉れざるにより再
 び催促しけるに同主人の云へるには尙我か云ふ事をしたなれば教へ遣は
 すと其近邊の山に連れ行き下を臨めは數千尺も有らんかと思ふほどの崖
 の上にある大木に登らせて兩足また右の手を離せと云ひける此人其云へ
 るまゝに任せて離せば後に残るは只左の手一本にして尙も指一本二本と

夫れより五本の指を丸手離さしめしに普通なれば崖の下に落ちるものなるに此人は其崖の下に落ちずして上天したり云々と御話しありて人たる者は神と一体なり神人は不二なり不生不滅なり形諸共生通し天地一体の神なる者ぞと釋き玉ひしかば赤木氏は講壇下に平伏して一心に聴聞せられけるが誠に心魂に徹し難有き事油々然として活氣心田に充ち渡り一心不亂に聴聞あられし内覺す頭を擧げ壇上を見玉ひけるに奇しきかなさしもに長さ年月天地日月の御光も辨へざりし盲眼に薄らくと教祖の御顔を拜し奉りしかば感動已むと能はず弘化二巳年十一月神文を捧呈ありける夫より御自宅に於て弘化三年二月九日を始めとして毎月七日の日を以

て講釋を勤められ同年六月大坂の節天心号を拜戴せられたりと

◎教祖神直授の禁厭を戴きて難病癒ゆ

弘化初年の頃岡山市野田屋町故黒田平八郎氏は本教の親炙門人にて其性篤實最も本教中の古事を取り調べられ信徒の信向手厚く古門人中有數の人にして其遺書も亦少からず其手記中に係るものに曰く廿七歳（弘化初年の頃）瘰癧にて咽喉の外部に膨れを來し段々治療しけれども更らに其効無く醫師は兎ても平癒六ヶ敷と申居けるか天命の未だ盡ざりしと見へ折しも一日教祖神御娘子様を御同道にて御出岡ありしを見受け奉り是れそ何よりの幸なりと御禁厭を相願ひしに其は安き事なりと仰せられ直く

に御入來成され承れば御難儀の由御禁厭を致し遣すぞと仰せられて暫ら
 く御祈念の上患部多御禁厭を施し玉ひしか腫物の上に御手を御懸けなさ
 れつゝ仰せらるゝに是れは御仕合て御座ります誠まことに結構けつこうなことで若し斯
 く内へ膨れ出でしならば喉へ湯も水も通るのでは有ませぬ然し私か禁
 厭を施しますれば直ぐに癒ると心を確かと御極め成されよと仰せられて
 御懷中より御洗米を取り出し玉ひ願くは椽側へ出で清淨なる水に日光を
 寫して難有く御戴きなされと仰せられしゆへ難有き事骨髄に徹し謹んで
 命のまに／＼なむたる處氣分忽ち舊ふるに復し清々しく爽氣身に溢れたるよ
 りに覺へたり其れより尋ひて治療を施したる處速かに御影を蒙り患部

は平癒し體體は舊に復したり此有難き御蔭を被りしを一步として遂に稜
 やに尊とき大神の道の都の神遊ひの群れに加はりたるは洵に 天照大神
 の御導きにて返へす／＼も有難き事なりしと同氏は信徒に對して自身の
 來歴を語る度毎に涙を垂れつゝ往事を示されしとぞ

◎不信者改心して御蔭を受く

美作國英田郡大原村大字江ノ原平民中安タカは十五才の時家出し所々漂
 泊中夫某は中風症に係りしに五十四才の時夫婦連にて歸村せしも他にた
 よるへき親族もなく困窮を究し折柄夫某は死亡せし故獨身にて僅かの行
 商をなし漸く糊口を凌ぎ居りしに明治廿四年五月上旬より乳眼病に罹り

左の乳房三升袋に物を入れし如く大きくなり其痛み甚しき事は何にたど
 へがたなく或日全村大字古町醫師豊福氏の診察を乞しに醫師曰く金三圓
 なければ治療し難しと病人云へる様金三圓にて颯張直して下さるかど問
 ければいや〜三圓にて病氣全快を請合譯にてはなし乳房と切斷治療す
 る而已に三圓又其上切斷すれば親族等の受書無くては治療し能はずとの
 事なれば素より貧窮にして三圓の調達に差支殊に其上如何成るやも難斗
 實に途方に暮れ其の后又全村大字下町醫師高橋氏へ(古町又十)診察を
 乞ひしに折悪しく不在なれば誠に力を落し落涙しふらく〜と古町へ歸り
 辰田守雄と云ふ温飽屋にて休足せしに主人妻に温飽をあたためマカ女に

出せと命するを(是は貧窮の上病氣なれば飢)マカ聞て云へる様御親切な
 れは半膳一膳にては不親切になりますと云ひ漸く半膳を食す其場に居合
 す人々マカの乳房を見て驚かざるはなし守雄は當所の黒住教會所へ參詣
 し御禁厭を受なは全快すへしと進めしにマカはいや〜其事は是迄井上
 たか(禁厭信徒)さんから度々御進め下されたれども私は教會所の前を毎々通
 行すれど參詣は勿論手を合せた事もなし今病に罹り難義をするとも平日
 無信心の私なれば御蔭どころか神罰を受ます人間と人間とでも平日深切
 にして置なねはまさかの時に助けては貰へませぬまして神様へとふして
 御願ひか出来ましようかと云ひ更に聞き入れる模様なかりしが其場に居

合せし高畑男氏は種々論して云へるよふ神は舊惡を咎めず心を改める時
 には直に神徳を蒙るふと疑ひなし何んで難からん今お前の其精神なれば
 必ず御蔭は受けられると説き聞かせば本人大に喜び同氏に随ひ教會所に
 至れば高畑男氏を詰合教師少講義佐古和作氏へ右の次第話せしに佐古氏
 種々御道の難有き事を説諭し禁厭を取次しに是迄の痛み取て捨たる如く
 平癒せりあら難有や勿体なや是迄御門前を通ふれども手を合せし事もな
 く頭を下けし事もなきに其御咎めもなくかく難有き御蔭を蒙るとは恐し
 やくと落涙し暫くして一禮を述て恙なく歸宅し數日の勞に其夜は能く
 寢入翌朝目覺て見れば櫻がひやくとせしゆへ能々見れば前夜まで三升

袋の如く大きく成て居たりし乳房が平常の如くに成て居れば病は夢か
 つゝか誠に御神徳とは申ながららる恐ろしやくと取物も不取敢食事も
 打忘れ直く様教會へ走せ行き一伍四什を物語りしに其傷に居合せし一同
 恐れ入さるはなし是全くタカ女の生質正直の誠を感應せしめて高橋醫
 師の不在も反て御蔭にてかく難治の病も衆人を以て神の御蔭元へ近づけ
 助け玉ふ御神慮なるべしあなかしこしく小事と見て疎に思ふへから
 す小事は大事の元にて御教語にも一扶桑木も二葉より蔭善惡は葦子を蔭
 よふなものごとあり小事より大事となるは天地自然の道理なりタカ女も
 年取つて居れど至而壯健にして人の小使或は僅かの行商を渡世とし所

方々貴賤の別なく馳回り神徳の難有事而已斷し誠を以ての神物語なれば
 聞人々難有くなり漸次斯道に入り（我も活き人をも活して天地の誠の中に
 遊ぶ嬉しさ）との如く貧しき中も追々心の儘に幸ひを得て少々の貯蓄金
 も出来日々安心に世渡りをなせり是全く御神徳なるへし（願くは斯道を
 以て博く黎元に及ぼし以て疾苦を救済し以て神樂を錫與するは獨り我大
 日本國而已に止まらず殊方異域凡坤輿の間日月の照曜する處咸く斯神道
 に化せしむべきなり）と教祖神の御豫言なれば小事ながらマカ女を鏡と
 し心怠らず本教をして早く万国へ押及ぼさん事を希望す

◎癩病全癒す

美作國二ノ宮に岩右工門と云へる人あり血統正敷家柄なるに奇妙なる事
 も有るものにて同人は黒鍬と申して新田開墾等を業とす或日常の如く土
 を起しけるに蛇の穴あり覗き見れば白蛇居れり岩右工門は是を干し殺に
 してやらうと穴口に一石を打込み八方を堅め出る事の不出來様に能く心
 を盡し置けり其後ふと岩右工門熱を發し追々病重り終に手足顔等惣身痛
 み醫療を施すと雖も更に功無く嘉永の末安政元年の頃は惣身爛れ癩病と
 相成り両眼失明し見苦しくなりし故他家へ縁付き居たりし娘も之れか爲
 に離縁せられ家内にも風波立ち依て岩右工門も日夜心痛の餘り活て甲斐
 なき此身成れば死るか増しなりと覺悟し或日家内の農業の爲め留主中を

癡うかひ下帶したびにて縊死いっしせんと用意せし折まから家内かない歸り來て其意こゝろを果はたさす又また或
 時ときは洪水こうすゐの折まりに溺死できしせんと河原かわらへ行石ゆきを袖そでに入れ身み投なげせんとしけるを
 同村どうむらの久山くやま忠兵衛ちへいゑと云ふ黒住門人くろぢうもんじん有り此人このひとに見認みこめられ自宅つれがへへ連歸つれがへり色々
 と説論せつろんし黒住教くろぢうけうを信しんし御道ごだうか腹はらに入りなは癩病らいびやうは愚おろかいか成なる病やまひも治なざ
 る事ことなし必死かならずしを決きしあやまることなかれ是これより備前國大元びぜんこくおほもとへ參詣まんげいし一心
 不亂ふらんに神明しんめいに祈いのるへしといと懇ねんに論ろんされ岩右衛門いわえもんも此説論このせつろんに感かんし家族かぞへへ
 も相談さうだんし一同夫いっどうぶれは難有事あたふたなりと勇立いさまた大元おほもとへ參る事ことに決定けつていす岩右工門心
 中このやまひちに此病治このやまひちせされは再またひ此家このいえに歸かへらすと思おもへは住馴すみなれし故郷ふるさとを去さり家族
 に別わかるゝ心苦こころくるし涙なみだにくれて漸やうやく發足はつそくし足あしも重おもく氣分きぶんも進すすまず泣な々なな五六

日ひを經へて大元おほもとへ參り如此見かく苦數くすう者もの御座敷ござしきへ上ある事は相叶あひかたひ申まをさるに付
 きせめて御庭ごにはの端成はしなりども御留ごどめ下くだされと厚あつく願ねがひければ第二だいに代宗信大
 先生せんせい始め人々ひとびとも不便ふびんに思おもはれ庭にわに筵ござを敷しき御禁厭ごきんえんを授まげ心得方こころのかたを論ろんされ御
 會日かいじつには説教せつけうを拜聴はいちやうし追々おそ心に難有なんと思おもふ事こともわれども何分なんぶん大病たいびやうにて身
 體たいより腦血のうけつは出でるし苦くるみしつゝ涙なみだにくれて寢入ねいりけるに無勿なげ体たいも夢中むちゆうに教
 祖神そじん現あられ御禁厭ごきんえんを授まげ給たまひ御歌ごうたをも給たまり難有あたふたふとざると言いひし聲こゑ自分の
 耳みみに入り覺されは枕まくらも床とこも涙なみだに濕うる夕ゆふふべまで見みへさりし眼めも見みへる故ゆゑに難
 有あいゝと申まをし覺さへす叫こゑびし聲こゑ御坐敷ござしきへ聞きへ詰合つめあひの人庭ひとにわに參まをりて其
 故ゆゑを尋たづぬれば夢中むちゆうの事ことを涙なみだなから相咄あひはなし授たまけ給たまひし歌うたは

靈 驗 集

身をおもふ枕の下は淵となる

みは浮草の寝入る間もなし

ケ様でありしと申すや岩右工門の夜具の上に何か紙に包みし物あり目を

開き見れば御七ヶ條と御洗米ありければ一同洵に有難く肝に銘し其旨を

宗信公へ申上げければ然らば座敷へ上らせよ御禁厭を施すべしと仰せ

られ則御神前に於ひて御禁厭を授け玉はり廿日斗經たれば故の如く惣身

の疵も癒へ全く平生の身となり目出度歸國致したれば家族は素より近隣

知己も大歡ひ致しけれ共難有も常になれば神様の尊とさ國の御恵も親の

恩も失れ程に思はれぬか凡夫の習ひにて岩右工門も月日の立に隨ひ御徳

靈 驗 集

の難有ひといふことは忘るゝとにも有らざれとも兎に角く世渡り活計の

ため又黒鐵石工の業を始めける或る日石を割り居ける内に思ひも寄らば

所より岩崩れ落り其石にて指二本を打碎かれソレ醫者よ薬よと大願を

なせし處へ赤木先生通りかより玉ひ是れ幸ひと御禁厭を願ひければ先生

曰く貴殿は先年其身も亡ひなんと覺悟の際勿体なくも教祖神の御恵によ

り天照太神の御助けを蒙り今の身と相成り世に云ふ天刑病も平癒し

家親族の邸辱も雪ぎたる上からは已に此身をは無き物と思ひ教祖の御神

慮に隨ひ天照太神の御徳を世の人に知らせ御神恩を報ひ奉らんと志

も立てず剩さへ大元の參詣も怠たりしは不心得千萬なるを故に足の指を

落し兼て取外したる敬神信心の誠を挺へよと正しく天より汝へ修行を命
じ玉ひしならん眞に難有き事と心を活しなは天の御恵にて又指も生へる
て有と諭し玉ひし上御禁厭を授け其足に土の付さしまゝ紙にて包み置か
れしに僅か一七日間を経て痛も無くなりければ紙を取り去り土を洗ひ見
れば元の如く指生へ居けるに是道は如何にと再び神徳の尊き事心魂に徹
し其後は専ら布教禁厭に従事し多くの人を助け其靈驗著しく廣く岩右工
門の名は遠近に隠れなきに至れり岩右工門は常に高坐上る毎に私は之
は癩病やみにて惣身崩れ掛りし廢れ物成りしに教祖神の御神徳にて如此
全快せしと披露するを同人の忝申すには癩病くくと申されては子孫の縁

談にも差支れは是れ耳は御用捨あるへしと云ひければ岩右工門曰く我家
の血統は正敷ありけるに我談つて難病に罹しも御蔭にて平癒せし以上は
此御かけを人様に廣めずては勿体なしと更に忝の申す事を聞き入れされ
ば忝は大に立腹して家を出たる由其後其人は智慧も抜け馬鹿となり一生
難儀致したるよし此岩右工門の一條を見聞するに付けでも神恩を報じ奉
らては誠に神に對し奉りて相濟まざる事たる理りは夢々忽になすべから
ざる事を思ひ確むべし

◎説教に感して癩僻全癒す

大坂堂島の教會にて濱田信太先生の勤め居られし時の事なるよし其の頃

幕府の與力役某氏は久々病に憐みしか同氏の説教を聴聞し且つ御祭服を
 受け遂に病は全快したるも元來某は甚敷癩僻性なりしか右説教中に「
 腹立てな物も苦にすな惡もすな天の恵みて福徳をます」との神詠ありは
 れければ某は熟く熟くと聽き居たるが忽ち常に此詠を服膺して忘れざる
 時は必ず我癩性も改るべしと思ひ右の御歌を自宅中に於ひて誰れの目に
 も見られ得る所に一々貼り付け扱て家内中の下女下男に至る迄呼び集め
 彼の御歌を指示して今日より以後は決してこの神詠に悖る様の行爲をせ
 ざる様にと互に盟約せしめしに先づ是れにて一家中腹を立てる事物と苦
 にする事もなければ家内は眞に神様の世界なりと一同安心して居けるに

一兩日の後下婢は例の如く床の間掃除しけるが忽ち過つても同家に寶物と
 して秘藏せる貴重なる置物を毀らたるにを這は不調法なりいと申を主人
 に申し出て詫ひ入りしに主人は豁々と怒り其は何たる事を彼の品は何に
 も替られぬ物なりッソを毀すとは已れはくと大に叱責せんとせしを傍
 にありし妻君は取合す御示の御歌は如何にやと注意したりしかは某は大
 に恥ぢ入り嗚呼其の通りなり我誤れりとして悔悟しければ一旦の怒りは消
 りて跡なく故なく済にけは其後も夫婦互に御歌を見ては互に戒しめつと
 心の僻みを矯め直しければ山滑にありかたぐ歳月を送りしとぞ
 編者曰腹を立て物を苦にするは一個一身の事にて敢て他の妨害になるべ

善はなまよふに思はるれども腹を立物を苦にするは陰氣なり其陰氣が内部に籠る時は勿体なくも天地生々の陽氣を汚すのみならず遂に病を生じ身を終ることあり又外部に發する時は君臣父子夫婦兄弟の間も仇敵となり甚しきは君父をも弑するに至る恐ろしき事なり故に我が本身は 天照大神の御分心なる事を忘れず常に御分心を大切にしていれば身も傷め汚さぬよふにするが斯道の本意ならん乎

◎精神の強さ靈驗

高弟の道歌に「氣も強く心も強く誠をば格別強く持ては神なり」と此歌の如く氣分強き人は萬事爲す業に功あるものにて伊豫國今治舊藩中に砂

田教孝と云ふ豪勇篤實質朴の士あり安政慶應年中幕府の末に當りて諸國舊藩主武備盛なる頃砂田氏は重量十八貫目の鐵柄の鎗を作らせ其鎗を自由遣ふにぞ諸人皆其力量に驚かざるものなく又白米四斗を袋に入れ腰に付け右の鎗を提げて奔走馳驅すること疾風の如し此人早く我が黒住教を信じ心を活し遣ふ事を自覺り下々を憐み貧民を救ひ上に立つ人に向ひては随分手強さ質なりけるか今治領分にも黒住信徒多く出來種々靈驗顯るる所より教旨の何たるを解せざる處より藩の重役より領内黒住教の信仰を停止しける此時砂田教孝氏は一日舊藩主の御前に伺ひ言上しけるは殿様には御長壽は御嫌いに御座候哉と窺ひければ候は其は何と申すか長

壽を嫌ふ人は何國にも有之間敷と宣ひければ教孝氏は席を進みて黒住教の主意を具さに申上げれば夫れは至極結構なる御教なりとの仰により然らば御領内人民に信仰自由の義を仰せ出られたしと上申し其れより一日の停止も夫れ切りに解かれたり其他色々靈験をも願はし亦政事上の事にも非凡なるともありしよし或時教孝室大熱にて良醫手を盡すと雖薬功なく他に施すべしと醫術なく依て教孝醫師に伺て曰はく爾々御手に叶ひ申せば考通りに致すべしと醫師の去りしを見て俄に風呂を立てせ病人を湯に入りせ少し緩きが故に嫁に火を焚かせけるに嫁は恐れて手も震ひ早速に熱付ず漸くにして湯の沸き上がりける時に病人を引揚げ毛布に包み襦

團を多くかけ御神水を充分戴かせ御禁厭を施しぬれば病人は快しと云ひ其儘三四時間熟睡して後眼を覺しぬるに夜具毛布とも水をかけし如く濕り居りたるが其まゝ熱去三日自には床を揚げ本復しければ醫師を始め衆人驚きし事あり又或時教孝氏鱈を捕りに行き一間斗りの川を飛びけるに向ふの畔の草の中に板の古さが有りて其れが鉋丁の刃の如く成り居たるが教孝の足の裏より甲に突き抜けたるを力を入れ引抜き畔にイみけるに血飛ひ上りぬ此時天を窺へは日は西に傾き玉ふ故暫く天を自眼み此川を飛びしは教孝が過なれども形に疵と付けられしは天照大神の御無念なりと申しければ血止りたる故又川に這入り鱈を澤山捕りて晩方宅に歸り足

を洗ふに更に疵なし不思儀に思ひ于息を呼び足の裏表を能く見れども海
 痕無き故父上さん貝か又は松葉等ありて少し痛く思はれしならんと申す
 然らば怪俄をしたる現場へ行て視るべし親子連れにて参りて見れば血疑
 まり冠笠の如くなりしを見て親子共打驚き改めて天に御断り申し上
 げ歸宅の上事厚く神前へ御禮拜す砂田教孝氏其後大元へ参り宿に居ける
 所へ作州津山在の人アナタの御蔭にて私も高大なる御神徳を戴きたりと
 厚く禮を述べ砂田曰く私は美作の國人参りし事なし御禮を受くる覺へな
 しと云ひければ貴殿は今治の砂田さんで御座らふ。左様砂田じや。然ら
 ば先年ケ様々々の御蔭を御受けなされし事之れ有るべし。夫れは其通り

じや。其御蔭話しを承り居たるにより先頃打網に参り網かゝりて揚がら
 ざる故川へ飛び込みしに船板の古さが水底にありて足に突き立ち古釘が
 甲迄も貫きたるを力を入れ引き抜き堤へ上り血飛び出る其時貴殿の御蔭
 御受なされし事を思ひ出し天拜を致し御陽氣を吹きかけたれば血止り矢
 張アナタの如く再び水に入り晩方歸り見れば疵更に無し是全く御餘徳な
 りと申しし事ありと語れり是等は全く教孝氏の誠意の他人にまで推及せ
 し處なるべし徳孤ならず必ず隣ありとは此類をや申すべきか

◎神庇に依り眼疾癒ゆ

往年教職江田造酒之進氏伊勢兩宮へ参拜（以前先生方の本教を未開の地
 に弘めらるゝには伊勢参りと